

鳥取県美術館フォーラム「みんなで考える 私たちの県民立美術館」

日時 平成30年2月6日(火) 13:00~16:00

場所 倉吉交流プラザ 2階 視聴覚ホール

【1. 主催者挨拶】

○中島教育委員長 皆さん、こんにちは。鳥取県教育委員会を代表して、御挨拶を申し上げます。なぜ県教委が出てきたかと申しますと、これから平成36年に向けてできていくこの美術館というものが社会教育施設で、県教委が中心となって今、その構想を進めているところでもあります。

どうしても私たちは、美術館というものを箱物であり、箱ができれば終わりで、あるいはややもすると一部の人が行かないものというふうに思いがちですが、もはやそういう時代ではないということはここにお集まりくださっている皆さんはよく御存じのことかなと思います。皆さん御存じのとおり、人口が減っていく、いろんな意味で経済的な規模も小さくなっていく、そういう状況の中で、当たり前ですけど美術館はつくるのにとってもお金がかかります。しかし、その投資というものが社会的な、鳥取県の小さくなっていくコミュニティーの未来をつくっていくために意味がある投資だからということで、この美術館建設という議論が出てきたのだと私は思っています。そして、今、県教委でこの構想を進めているのも、その美術館というものをどうやって私たちの先の見えない未来、私たちのコミュニティーの見えない未来の中でどういうふうに、本当に生きたものにできるか、小さいけれども誇れる、ユニークな、そして多くの人が集える場所にできるのかということを考えていくということが私たちにとって非常に重要なテーマだなということをお心に銘じながら、構想を進めています。きょうも途中経過の御説明も申し上げますけれども、皆さんからいろんな御意見をいただきながら、この構想をより深めていくという一つの機会、通過点にしたいなと思っています。

本日のフォーラムは大きくは2部構成になっておりまして、前段で小説家の原田マハさんに美術館についてのお話をいただきます。原田さんの作品を拝読しますと、作家とか美術という営みの周辺にある人間をずっと凝視されて、人間にとって美術というものがどういう意味があるのかとか、そもそも人間とは何なのかということに関して、非常に多様な形で洞察を展開されている、その人間に着目されているという点がやはりきょうの私たちが考えたいことの一つの重要なポイントになるのではないのかなと思っています。

それから、後段では、鳥取県の各方面の御専門の皆さんにお集まりいただいて、美術館がこうだったらいいのではないかみたいなことをいろいろアイデアを出していただいて、深めていくということになればいいと思っています。

繰り返しになりますけれども、美術館はきょうも「県民立美術館」という名前になっていますけれども、県がつくって終わりというものではなくて、県民の皆さんで美術館というものがどういう場所になったらいいのかということをお考え続ける、そのプロセス、それはずっと続くものだと思います。できて終わりということではなくて、とりあえずつくるために考え、そしていろんな営みをし、また修正して続けていく。そういう果てしのないこういうプロセスをこれから始めていく、そのかなり初めの中の一歩のようなものとしてきょうの集いがあるのかなと思っています。いろんな御意見、お考えが聞けたり、御議論が展開するということを期待して、私からの初めの挨拶とさせていただきます。(拍手)

【2. 共催者挨拶】

○石田会長（拍手）改めまして、皆さんこんにちは。きょうは本当にこの平日のお昼という出にくいお時間にこうして本当に大勢の皆さんに御参加をいただきまして、大変ありがとうございます。

今、御紹介いただきましたように、「県立美術館と共に歩む中部地区の集い協議会」という少々長ったらしい名前の会をつくって、会長を務めさせていただいております倉吉市長の石田でございますけれども、この会をつくった経過は、昨年、我々中部地区の住民が待望しておりました県立美術館がこの隣接するラグビー場に整備をしていただくということが決まったわけでありましてけれども、この美術館を本当にいいものにしていくためには、やはり中部地区の住民がそれぞれ、もちろん県が整備されるものではありませんけれども、自分のものとしてこの存在を共有しながら、美術館施設を「活用」と言ったら大変失礼ですけれども、利用したりあるいは観光とか経済活動とかまちづくりとか、その地域活動に生かしていく、そういう取り組みをそれぞれの立場でしていくということが非常に大切なのではないかと、まさに県民立美術館にしていくことが重要なのではないかとということから、こういう組織を立ち上げたわけでありまして。

芸術、文化、教育関係者だけではなくて、福祉とか経済団体あるいは地域づくりの団体、自治会、本当に大勢の関係者の皆さんに御参加をいただいております。この美術館というものが、もちろん観光とかまちづくりにも本当に大きな役割を果たしていただけるのだらうというふうに思っておりますけれども、単なる地域エゴにしないためにもその性格、役割というものを一人一人がしっかりと理解をして、その上に立って応援をし、利活用していくということが大事なのではないかなというふうに思っております。そういう意味でもこういうフォーラムを通じて理解を深めていただければと思います。

これからいろんな方のお話を聞いていただいて、それぞれの立場で理解を深めていただければと思います。短い時間でありましてけれども、皆さんにとって有意義な会になりますことを心より御祈念申し上げて、御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお祈りします。きょうはありがとうございました。（拍手）

〈日程案内 略〉

【3. 美術館検討状況説明】

○田中館長 皆様こんにちは。きょうは非常に雪の積もっている中、本当にきのう心配しました。原田さんが本当に到着していただけるだろうかといったようなことをいろいろ心配もしながら、でも無事にこうやってフォーラムを開会できました。そしてこんなに多くの方々に詰めかけていただきまして、この美術館に対する期待の大きさと、やっぱりマハさんの話を聞きたいというその期待の大きさと、その両方を感じているところであります。

では、検討の状況につきまして、少し簡単に御説明を申し上げたいと思います。前のほうのスクリーンもご覧いただきながら、お話を聞いていただけたらと思います。

県民の皆様であれば御存じのとおり、鳥取県の美術館をこの倉吉のラグビー場に整備をするということで、昨年度末にこういう基本構想ということ策定する中でそれを決定いたしました。倉吉市営ラグビー場というところは、隣に倉吉未来中心等いろいろな集客施

設もございますし、それから白壁土蔵群等の観光周遊施設もございますので、そういうところとの連携といったようなことを強く意識して、こういう立地がいいのではないかなということに決めたところでもあります。

そして、この美術館の機能として非常に抽象的な言葉ではありますが、大きく『県民の創造性と鳥取県の魅力の向上』、それから『鳥取県の美術の継承と発信』『内外の美術との接触と交流』といった鳥取県の美術の新しい展開、そういったようなことをぜひこの美術館が中心になって取り組んでまいりたいと考えているところであります。

きょう、この倉吉交流プラザというところでフォーラムを開催しているのですが、そのお隣、倉吉市営ラグビー場があるところ、ここの敷地を倉吉市から御協力をいただきまして、約2万2千平米の非常に広大な敷地であります。ここの地に新たな美術館を立地させていきたいと考えております。周辺には、倉吉未来中心を初めとして、倉吉パークスクエアが広がっておりますので、こういうところの連携ということを考えていく必要があるのだらうなというふうに考えております。

それから、「鳥取県立美術館整備基本計画の検討スキーム」のスライドです。基本構想の後には基本計画というものをつくっていくことにしております、今、その作業を鋭意進めております。その中で、いろんな関係者の方々あるいは県民の方々からいろんな声を聞きながら最終的に基本計画という形のものにまとめていこうという作業をしております、その全体的なイメージをスキームとして表現しております。一つ一つは説明しませんが、そういう形で、きょうの会も含めて多くの方々から意見をいただきながら、美術館の基本計画をまとめていきたいと考えております。

そして、「今後のスケジュール」ですけれども、今申し上げました基本計画というものを今年度の3月末までにはまとめてしまいたいと思っております。そして、もう1点、鳥取県は今、非常に大きな公共施設をつくる場合は、PFI手法というものの導入の可能性をあらかじめ調査をするということになっております。このPFIというのは、県の施設、公の施設ですけれども、そこの整備や管理運営に民間の力をできるだけ使おうといったような形のことで、そういうことに参入する民間の方々の可能性についてあるいはそうすることでどれだけ効率的な整備であったり運営ができるかということの可能性の調査をするというのを、必ず前段に置くことになっていまして、この調査もしながら、この計画をまとめていくという形のことを今年度内に一つ整理をしたい。そして、それをやった上で、どういうやり方で美術館を整備していくかというのを来年度の前半のうちには決めて、次の段階に入っていくということになります。ですから、具体的に設計であったりという形で美術館の姿が見えるようになるには、まだもう少し、平成31年、32年といったようなところで、こういったような作業を進めていく中で設計ができ上がってきて、姿が少し見えてくるのかなということになります。非常に長い取組みになりますが、今のところオープンは平成36年度を目指しているところであります。

次に、「美術館に求められる機能と特色」ということで、先ほどから主催者挨拶で、県民立の美術館という言葉が出てまいりますけれども、その基本構想の中で県民立の美術館を目指していこうということでお決めにいただきました。それをもう少し具体的な言葉にするとどういう言葉になるのだらうということいろいろ検討してまいりまし『未来をつくる』美術館』ということを考えていきたいと思っております。何をつくるのか、何でつく

るのかという話ですけれども、それは美術館にまつわる人をつくっていく。それから美術館の立地をするところも含めて、鳥取県全体のまちをつくっていこう。そして、美術というものを通じて、鳥取県の未来を支える県民、その県民みんなで作っていこうという、こういう大きな3つの柱、そういうものを考えていきたいと思っています。そして、これらが具体的に何をしていくかということで、美術館の機能であったり、それから特色であったりといったような、そういうところを考えようということで、今、整理を進めているところであります。その間には、こうやってアドバイザリーの委員会であるとか、それから県民の皆様からのいろんな意見を取り入れて、そこを整備していこうというふうに思っております。

その中で先ほど申し上げました「つくる」という部分で、まず『1. 人を「つくる」』ですけれども、ここに4つほど書いております。まずは、美術館ですので作品を『「みるひと」をつくる』、と言うと少し言葉は語弊がありますが、わかりやすい言葉として使わせてもらっています。「みるひと」をつくる。多くの人においでいただける美術館にしたいということで、こういったような取組みをしていきたい。それから、美術の創造者、創作者をつくっていこうということで、『「つくるひと」をつくる』。創作者を支援していく、そういう役割を果たしていこうといったようなこと。それから、『「みらいの才能」をつくる』ということで、この美術館の機能を生かして学校教育と連携しながら、子供たちにとって美術といったものを通じて子供たちの能力を開発していこうという、そういう教育のプログラム、そういうものもつくっていきたいと思っております。もう一つ、『「居場所」をつくる』ということで、最近よく図書館の世界でサードスペースという言葉があります。自宅でもなく、そして職場や学校でもない、一人一人が思い思いに過ごせる、そういう心地よい場所、それが美術館になればいいなといったような、そういう機能も目指したいと考えております。

『2. まちを「つくる」』という部分でありますが、隣に倉吉パークスクエアがござい
すのでそういうところとの連携、それから美術館ができる前には大御堂おおみどうはいじ廃寺跡という国の史跡がござい
ますので、そこと連携して広がりのある美術館をつくっていく。そして、この場所にあります倉吉市立図書館等、他の社会教育施設との連携、そういうことをやっていこうということがあります。それから『地域とまちをつくる』ということで、倉吉市の周辺のさまざまな施設、あるいはポップカルチャーの資源が今倉吉にどんどん蓄積を
してまいりますので、そういう資源の活用といったところもあわせてやってまいりたいと思
います。それから当然、県立美術館でありますので、県内の他の美術館とも広域的な連携を
しながら、県内のどこの場所どこの美術館に行っても、県立美術館のいろんな恩恵に浴
せるような、そういったような取組みをしてまいりたいというふうに思います。

最後に『3. 県民が「つくる」』ということで、まずは『県民が誇れる美術館』にしてまい
りたいと思いますし、それから美術館をつくっていく過程、あるいは先ほど中島教育委
員長が申しあげましたが、もうできた後いかに関わっていただくかという形で、美術館を
運営していく過程にも県民の方々にしっかりと関わっていただけるような、そういう仕組
みをつくっていきたいと思っております。そして最後に『展示・収蔵品とともに成長して
いく美術館』、これが一番もともとの美術館のコアな部分でありますけれども、今、県立

博物館でも美術作品は約9千点所蔵しております。寄託等も含めば1万点近い作品を持っておりますので、そういうものをどんどんふやしていきながら、やはりコレクションの充実といったようなこと、それから調査研究、そういった面もしっかりベーシックな部分として取り組んでまいりたいと思っております。

それから、『鳥取県ミュージアム・ネットワーク』の取組みです。先ほど申し上げました、鳥取県内で、そう多くはないんですが美術館を標榜している施設がございますので、そことの連携ということをしかりやってみたいと思っております。美術館同士で連携して、巡回展であるとかあるいは作品のデジタルアーカイブ化をして、どこの館でもその作品が見られるようにするといった、そういう展開ができないかなといったことを今、検討を進めているところであります。

もう1点が、美術館の中に『美術ラーニングセンター機能の設置』を考えております。美術というものを通じた学びの中で子供たちを育成し、いろんな発表の機会も設けて、子供たちの変容というところをしかり取り組んでいきたい。それで鳥取県の未来を支える子供たちを「美術を通じた学び」で育てていきたいと考えております。

それから、『美術館が求められる役割と活かし方』ということで、ここに県民や地域の方々にも意識をお願いしたいのですけれども、こういう隣接する地域とのまずはシナジー効果（相乗効果）を出していくといったようなことを中部地区の方々と一緒に取り組んでまいりたいと思います。ぜひその辺の御協力もお願いをしたいと思います。もう1点、美術館というのは人それぞれで求めるものが違うのではないかなと思います。美術館は基本的に、この①から⑤までの機能があるかなと思っています。①教育機関として、社会教育施設としてさまざまな展開をする。あるいは収蔵作品を中心とした調査研究をする、その②研究機関でもあるということもございます。それから、当然にそういう収集作品、あるいはさまざまな企画展を展開する中で、そういう③展示施設としての機能、そこも果たしていく必要がありますし、県内の美術の創作者の方々の発表の場ということにもなるかなと思います。それから、最近できる新しい美術館の機能として、やっぱり④地域づくりの拠点として、文化的感性の高い地域をつくっていくことに貢献をしていく。そういう役割も果たしてまいりたいと思っております。そして、やはり地域の経済への活性化というところにも少しでも協力、貢献をしていくという意味で、⑤集客施設として、より集客性の高い魅力のある展覧会の開催といったことも考えてまいりたいと思いますし、それから周辺施設との連携ということも考えていく必要があるというふうに思っております。そして、もう1点は⑥各自の「私たちの県民立美術館の創造」、これは地域の皆様にもお願いしたことですけども、それぞれ県民一人一人が自分の美術館としてどういうふうに自分が関わっていったらいいか、美術館を単に展示のサービスを受ける側ということだけではなくて、一緒になって何かをつくり出していく、関わっていく、そういったような形で美術館を支えていただくといったようなことについてぜひ考えていただけたら、我々美術館の関係者としては非常にうれしいなと思っております。

非常に簡単ではありますが、経過としてこのような状況で、今検討を進めているということをしかり御紹介申し上げたいと思います。原田マハさんの講演を楽しみにしていられる皆さんの前のほんの前座としてお聞きいただきまして、ありがとうございました。以上でございます。（拍手）

【4. 基調講演】

〈原田マハさんの紹介等 略〉

○原田氏 皆さんこんにちは。原田マハです。たくさんの皆様にお越しいただきまして、本日は本当にありがとうございます。

講演会するとき、いつも言わせていただくことがありまして、冒頭の5分は必ずこの話題で費やすと決めているトピックがあります。私は、すごい晴れ女なんですね。それで、今まで本当に全国津々浦々講演会をさせていただいているんですけども、99%の晴天率の晴れ女でございます。1%というのは本当に、もう今まで、どこかで講演会をしたり旅に出たり出張に行ったり何かイベントがあるというときに、たしか1回だけ雨が降ったことがあったような気がするんですが、ちょっといつのことだったか記憶にないぐらい、必ず私の行くところに晴天が訪れるということで、これを先に言うておくと「ありがとうございます」と感謝していただけるので得した気分になるので、いつも最初に言わせていただくんですけども、その代わり雨が降ったら必ずおわびをしなければいけないということで、きょうは皆さんにありがとうございますと冒頭で言うていただいているいい気分を始めさせていただこうと思ひまして、すみません、ちょっと冒頭で関係ないことを申し上げましたが大好きな鳥取にまた帰ってまいりました。

鳥取は、本当に私、今までもプライベートでも仕事でも何度も来させていただいているエリアでして、私が今から7年ほど前に書きました『まぐだら屋のマリア』という幻冬舎さんから出させていただいた料理を通じた人生の物語ですけども、これははっきりと地名は書いてないんですけど鳥取がモデルになっておりまして、そのために、8年ぐらい前かな、それまでも来たことはあったんですけども、鳥取に編集者とやってまいりまして、ずっと海岸沿いに取材をして歩いて、人のいない11月の平日にトレンチコートを着て、ちょっとまぶしかったのでサングラスをかけて、港町をうろうろしていたら、ミニパトが後ろから付いてきたという、ちょっと工作人員に間違われたかもしれないんですけども、そんな体験もありまして、自分にとっては非常になじみの深い鳥取という場所であります。

また、鳥取は非常にすぐれた芸術家、それから工芸で有名な場所ですよ。おとし出版をさせていただきましたバーナード・リーチに関する「リーチ先生」という小説を書きましたが、その取材もありまして鳥取の工芸の窯元ですとかそういうところを訪ね歩きましたし、また鳥取民藝美術館のほうにも何度か来させていただいたことがあります。岩井窯という岩井温泉にある非常にすばらしい窯元にも行きましたし、それ以外にもいろいろなところを訪問させていただいた大好きな鳥取、そして倉吉はきょうが3回目でございます。今まで何のために来たかという、三朝温泉に来たこともあるしとち餅を食べに来たこともあります。そして、倉吉市内にあります骨とう品店で骨とうをがさっと買って帰ったりいろいろな思い出がありますので、きょう倉吉に来させていただいたことは自分にとって本当に大きな喜びであります。そこでまた、自分にとって大好きなアートについてお話をさせていただく、そして新しくできる美術館についてコメントでも文句でも何でも言っていていいということで、好きなことをちょっと言わせていただこうかなと、遠慮なく言わせていただこうかなと思ひまして、それを聞くとちょっとどきどきする館長や市長がおられるのではないかなと思ひますけども、忌憚なく意見を言わせていただければと思ひます。

まず、私の私的な思い出を少し、美術館に関してさせていただきたいと思います。なぜかといいますと、皆さんいろいろな思いを美術館にお持ちでいらっしゃる方、あるいは美術館には行ったことはないけど、アートの小説を読むのは好きだというような方とか、あるいは、今度新しくできる美術館に興味を持ってどんなものができるかというふうに期待を込めて傍観されている方もいらっしゃると思うんですね。

小説の一つの手法、あるいは私、スピーチライターの話も書いたことがあるんですが、スピーチの一つの手法として、まず私的な話というのをパブリックの前ですということの方がオーディエンスの気持ちをぐっとつかむというのがこれポイントなんですね。ですから、私の、もうまるっきり自分のことなんですけどもお話をさせていただいて、皆さんの中にある、あるいは思い出と重なる部分ももしかしたらあるかもしれないので、ちょっと聞いていただきたいんですけども、私の人生は本当にアートとともに人生を歩んできたというふうに言えると思います。アートが大好きな少女でしたし、アートが大好きな学生でもありました。そして、アートとともに歩んできた結果、アートが大好きな大人になって、アートが大好きな小説家になりました。そして今、こうして皆さんの前で美術館とアートについてお話をさせていただくという機会を与えていただいたので、やはり心からアートに感謝をしているという、そういう立場であります。

そんな私の初めての美術体験について、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

ここに『初めての美術館体験』と書いていますが、そもそも何でそんなにアート好きな少女だったかということをお話させていただきますと、私が初めてのアート体験というのをしたのが3歳のときだったんですね。それで、どなたでも皆さん、最初に会って見た瞬間に、このアートはすばらしいなと思った瞬間が、アートが好きな方だったら必ずあると思うんですけども、私の場合はそれがレオナルド・ダ・ヴィンチのモナリザだったんですね。もうちょっとべた過ぎる展開なんですけども、子供心にレオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》を初めて見たときに「絵がうまいな」と思ったんですね。いや「すごく絵がうまい人だな」と。こんなきれいな絵を私も描いてみたいということで、絵を描くのが好きな子供だったので、チラシの裏に白いところがあって、そこに《モナ・リザ》の模写をしたりとか、そういうことをしたりするような子供だったんですけども、どこでモナリザを見たかという、もちろんルーブル美術館ではなくて、私の父が当時、美術全集のセールスマンをしていました。それで今のように便利な世の中ではなくて、昭和40年代ですから、訪問販売といって美術全集全30巻とかの中での1巻とか2巻を見本で持って、戸別訪問しまして、それで家庭訪問して、「奥さん、お宅のお子さんの情操教育に、一家に一冊いかがですか」ということで、私の父はセールスマンをやっていたぐらいなのでかなり口八丁な人だったんですけどもそうやって売って歩いていたら在庫の山が我が家にどっさりと積まれていまして、本当にもう縄文時代の土器から《モナ・リザ》からバロックからモネまで、さまざまな古今東西の美術がその全集の中にあったわけです。子供の私は、その絵があるその本に興味を持って眺めていたわけですけども、そうこうしているうちに《モナ・リザ》が目について「ああ、何かこういう絵を描きたいな」と。子供のころの夢は絵描きさんになりたいとあるいは漫画家になりたいとそんなふうに思っていたぐらいアートが大好きだったんですね。私の父は子供が好きなものを与えるのが非常にうまい人で、私がアートが好きな子供だというふうにわかったら、絵画教室にも通わせ

てくれましたし、あとはデパートで展覧会なんかがあるとよく連れていってくれたんですね。そんなこともあって、アートを見たりアートに触れるというのが、本物に触れることはそんなにはなかったんですけども、日常的に何か絵というものが自分のそばにあるというのが普通の状況だったというそういう子供時代を過ごしました。

そして、そんな私が、美術館はいろいろ行っていたんですが、初めて美術館というものを自分が意識的にこういう美術館ってすばらしいなと思った体験があったんですね。それがここにありますように、『1972年の夏、10歳』のときのことでした。このとき、私の父がセールスマンをしていましたので、岡山に単身赴任に行っていたんですね。家族は東京にいたんですけども、この夏休みにちょうど山陽新幹線が東京から岡山まで開通したときだったんです。それで、新幹線に乗って岡山においでということで家族が呼び寄せられまして、私も初めて新幹線に乗るのもうわくわくしながら出かけていきました。そうしましたら、岡山駅のホームに父が迎えに来てくれていたんですね。それで私の顔を見るなり「ちょっといいところに連れて行ってやるから付いてこい」と。どこなんだろうと思ったら「おまえが大好きなところだ」と言って連れて行ってくれたところが倉敷の大原美術館だったんです。

やっぱり倉吉、鳥取と岡山、姫路、岡山の周辺というのはそんなに離れていないので、大原美術館にいらっしゃった方も結構いらっしゃるのではないかと思いますけれども、大変すぐれた名門美術館ですよ。本当に鳥取県立美術館はこれからできますけれども、大原美術館は非常に長い歴史がありまして、開設されたのが1930年です。あのニューヨーク近代美術館、MOMAが開設されたのは1929年、その翌年にもうできていたということで、いかに早く西洋美術というものが日本において受容されたかということ象徴している美術館だと思います。大変優れた美術館で、何が一番優れているかということ、もう何しろコレクションがすばらしいですね。コレクションもすばらしいし、さらにすばらしいのは、すばらしいコレクションがあるとそれに寄りかかってしまっただけだと思っんですけど、大原美術館の優れたところは、コレクションに寄りかかるばかりではなくて、やはりプログラムを充実させようとか、あるいは古いアートばかりではなくて現代アートにももっと場を開こうということで、大原美術館主催の現代アートのコレクション展もどんどんやっていますし、隣接した場所に有隣荘という大原家がもともと持っていた古い家屋があるんですけども、この古い日本家屋を現代アーティストに開放して、1年間に1人だけだと思っんですけども、そこでそのアーティストが特別に「サイト・スペシフィック」と言うんですけども、その場所に当てて作品をつくるというようなプログラムをやっていたり、常に新しく行けば何かが見られるという大変な工夫をされていらっしゃるんですね。

そして、私はこの大原美術館に10歳のときに初めて父に連れていかれたんですね。その瞬間の衝撃を今もはっきりと覚えています。正面の一番右側にありますこの写真が、倉敷、大原美術館の正面の写真なんですけど、このステップを上がって行って、ここが正面の入口なんですね。当時、このステップを上がって入っていったところが正面のギャラリーにばあんと私の視界に飛び込んできた絵がここにあります。これシャヴァンヌという、フランスの19世紀の画家ですけども、シャヴァンヌの《幻想》という作品が飛び込んできまして、わあっとなって、すばらしく美しい作品なんですけども、皆さんの中で『楽園

のキャンバス』をお読みになった方もいらっしゃるのではないかと思います。実はこの私の書きました『楽園のキャンバス』という小説の中の1ページ目の1行目にこの絵のことが出てくるんですね。本当に私にとってはもう人生で忘れることのできない瞬間、私の中に美術館というのが飛び込んできた瞬間だったので、もう小説に書かずにいられなかったんですね。それで、『楽園のキャンバス』の中で書くときもどうしても1ページ目の1行目に書きたいということで、1行目に『ここに、しらじらと青い空気をまとった一枚の絵がある。』という書き出しだったんですけども、もうシャヴァンヌの《幻想》で始めようと、10歳の少女のときに得たあの衝撃のままにこの大原美術館というものを小説の中で登場させようという思いで書きました。そのシャヴァンヌという画家のこの《幻想》という作品です。見た瞬間に「はあ」ってなって、それでもうすぐとりこになってしまったんですね、すぐに。それでだんだんギャラリーを進んでいくと、もう次から次へと名作が出てきて、もうちょっと先のほうに行くとエル・グレコの《受胎告知》という大変な名画がありまして、本当に皆さんこの作品が日本にあるというのは奇跡なんです。エル・グレコの全作品ってそんなにたくさん数はないし、バロック時代の画家で、何でエル・グレコの作品が日本のしかも倉敷にあるんだらうと、ちょっと謎ほどの名画なんですね。もちろんシャヴァンヌもそうなんですけど、まあこれは当時の大原孫三郎さんという大原美術館の創設者の方の思い切った決断と、それからその大原孫三郎の美術アドバイザーだった児島虎次郎という洋画家がいたんですけど、この児島虎次郎は地元の洋画家で、大原さんが、彼は一種のパトロンのような役割で、この虎次郎をパリに送り込んで、美術館をつくりたいからどんどん絵を買ってきてくれということで送り込んだ。児島虎次郎は自分で、画家としての勉強もできるし、優れた名画をある程度の予算を持って買うこともできたという、ちょっと奇跡的なことがありまして、このエル・グレコの《受胎告知》をパリのとあるギャラリーで見つけたときに大興奮して大原孫三郎にすぐ電文を打ったと、電報を打った。「これを逃したらもう一生の損だ」と「何としても買ってほしいからお金を幾ら幾ら送ってほしい」というふうにすぐ電報を打ったら、大原孫三郎は「よし、それを買え」とすぐお金を送ったという、こんなことが倉吉の美術館にもできるといいなと本当に思いますけれども、まあタイミングなんですよ。名画とのめぐり会いというのはまさにタイミング。その奇跡的なタイミングを経てこのエル・グレコやシャヴァンヌがこの大原美術館にもたらされた。

そんなことを当時の私は全く知る由もありません。10歳の私はもう胸をどきどきさせながら、次はどんな絵画が出てくるんだらうと思ってどんどん進んでいきました。そうしまして、1枚の絵の前ではたっと足を止めて見上げた先にあったのが、このピカソの《鳥籠》という絵なんですね。私は、この作品を見たときにこそもう雷に打たれたようにもうびりびりとしてしまって、今でもその衝撃をはっきり思い出すんですけども、もう動けなくなりました。そのときの私の率直な気持ちは「下手くそな絵だな」と「こんな下手くそな絵が何でこんなすばらしい美術館にあるの」というのが10歳の正直な気持ちでした。それで、生意気なことに私はそのとき絵描きになりたいと思っていたものですから、「こんな下手な絵がこんなすばらしい美術館に飾ってあるんだったら、私の絵も当然将来飾られるだらう」と。何かものすごいポテンシャルをその大原美術館に見出したんですね、逆の意味で。それで俄然やる気になって、もういつの日か大原美術館に画家として自分は

凱旋するんだみたいな妄想を抱きまして、それからピカソが自分にとってのライバルのような存在になったんですね。

その後も中学校になったときに美術の教科書の表紙がマチスだったんですね。年度初めに教科書を配られますよね。それを見たときに「下手くそだな」と思って「こんな奥行きのない、遠近法も何もない絵を描くアーティスト、ひどいな」とますます自分の画家としての目覚めといいますか、「何か私、いけるんじゃないの」「マチスが教科書の表紙になるぐらいだから、私の絵も教科書の表紙になるかもしれないよ」と思ったりして、その後には今度はアンリ・ルソーの絵を画集で見つけたときにいよいよもって鼻で笑いましたね。「いやあ、世の中って下手くそな絵描きがいっぱいいるもんだな」と。

でも、何かその下手くそな絵描きたちが私にとって人生でずっと人生をかけて追いかけていきたいアーティストになったわけですけども、思わぬところで転機が訪れまして、それは『1983年夏、21歳』のときですけども、忘れもしない、京都市美術館にてピカソに私大接近するんです。どう大接近したかといいますと、それまで私の中で、まあ、下手な画家たちの一人だったんですね。それで、ちょうど私の21歳の誕生日だったのですが、そのときに京都市美術館で多分過去最大の日本におけるピカソの大回顧展が開催されまして、ピカソの70年の画歴の中のほとんどメインのものが来るという大変すごい展覧会が来ていたんです。それで「ライバルのピカソ、どのぐらい下手か見に行ってみようじゃないの」ということで誕生日を記念して見に行ったんですね。そこで、その展覧会に入った瞬間に私の目に飛び込んできたのがこの絵だったんです。ピカソの青の時代の《ラ・ヴィ》という「人生」というタイトルの作品で、何とピカソが24歳のときの作品なんですね。私は「ええっ？」と、この作品を見たときに「ちょっと待って、上手いじゃない」と思って、「えっ、これ本当にピカソなの？違うじゃない？」、私の中のピカソ像が180度この瞬間に変わってしまったんですね。それで、そのピカソの回顧展を見たら、やっぱりものすごい天才だということがようやくわかりまして、遅過ぎると突っ込みをいつも自分に入れるんですけども、遅過ぎた気づきだったんですが、ピカソは本当にすごいということをようやく理解して、それからもう本当にこのピカソという人は、私の人生のメンターのような、導師、導いてくれる人のような、そんな大きな大きな存在になりまして、本当に人生を通して今現在もこのピカソの存在に励まされ続けたと、そういう人生を送ってまいりました。

そして、社会人になってからも私は折々にアートに励まされたという思い出があります。その中の一つを御紹介いたしましょう。またピカソなのですみません、「どんだけピカソが好きやねん」とちょっと突っ込んでいただいても大丈夫ですが、本当に10歳のときからずっとピカソなんですよ、とにかく。とにかくずっとピカソなんです。それで、このときは、この作品を初めて目にしたのは25歳のときだったんですけども、もうピカソショックの後です。ピカソ2回目のショックの後で、当時、私はまだアート関係の仕事に就いたばかりで、そのときはアートのマネジメントの学校みたいなところにちょっと勤めていた時期がありました、1年間ぐらい。そのときに、いろいろな現代アートのいろんな側面をいろんな専門家の方をお招きして、ワークショップのようなことをやるという、小さな寺子屋のような学校を東京都内でやっていたんですけども、その責任者だった時代があってそのとき25歳だったのですが、ツアーを組みまして、生徒さんたちを25人連れてニ

ニューヨークに行ったんですね。そのとき私、ニューヨークに行ったのが2回目ぐらいで、右も左もわからなかったんですが、自分もニューヨークに行けるからともう大喜びで行ったんです。ところが、いろんなことがうまくいかなくて、25人の生徒さんが、結構戸惑ってしまうような場面が何度もありまして、それでそのときに引率していった責任者の大学の先生にもものすごく叱咤されたんですね。「ここまで来て、おまえ、何やっているんだ」と。「本当にアートの世界で仕事をしたいと思っているんだったら、こんな怠けたことじゃだめだろう」とものすごく怒られてちょっと物別れになってしまったんです。それが日本だったらもう本当に泣いて家に帰ったところだったんですけども、ニューヨークから帰ることもできない。どうしようというふうに思って、立て直さなきゃいけないと自分で自分を励ましたんですが、どうしても立て直すことができなくて、どうしようと思ったときに、メトロポリタン美術館に行ったんですね。それでメトロポリタン美術館に行って、広い美術館です。いらっしゃったことがある方もおられるかと思いますが、その中でさまよっているうちに1点の絵の前にたどり着くんですね。そのときに見たのがこの《盲人の食事》というピカソの青の時代の名作なんですけど、目の見えない男性がテーブルの上で今まさにつぼを手繰り寄せている食事の、貧しい食事のシーンを描いた作品なんですけども、この絵の前にたどり着いたときに「ああ、ピカソだ」と。「これを見るため、私、ここまで来たんだな」と思ってそのピカソの絵の前で一人で佇んでいたんですけど、そのときにこのつぼの中に一体何が入っているんだろうと思ったんですね。それで、すごく貧しい人だから水かもしれない。だけど、その彼の心を沸き立たせるために、このつぼの中にワインが入っていたらいいなとか、もしかしたらミルクが入っているかもしれないといういろんなことを想像しているうちに、何だか涙がとまらなくなってしまったんですね。うわあと泣いている25歳の日本人の女性。ピカソを見ながら泣いている、一人で泣いている謎の女だったんですけども、そうしましたらそのときに私のことをじっと見ている人がいたんです。その人は、アフリカアメリカ人のアメリカ人の警備員の方だったんですね。セキュリティースタッフが各部屋にいるんですが、その人がじっと私のことを見えて、近づいてきて、彼が私に聞いたんです、「アー・ユー・オールライト？大丈夫？」って。それで私「イツ・オールライト」と答えたんですね。そのとき余り英語もしゃべれなかったもので、ただ一つその言葉だけが自分が言えた英語だったんですけども、「イツ・オールライト」と言ったときに、その言葉が何かね、ピカソに言われて自分が答えたような気がしちゃったんですね。それで、はああっと思って「あ、大丈夫だ」って「だって、このアートがあるんだもん。このアートを守って私に見せてくれる、この美術館があるんだもん」と思って「もう絶対大丈夫だ」とそのときに初めて自分のことを立て直すことができましたんですね。

そのときからずっと私は、アートという存在に励まされ続けてきたんですね。そういう存在って、皆さんにもありませんか。まるでそれは友達のような存在ではありませんか。私にとってアートというのは、本当に人生の友達。そしてその友達が住んでいる家、美術館は友達の家だというふうにそのときからずっとずっと思い続けています。ですから、私は世界中いろんなところに旅をするんですけども、一人旅をすることも多いんです。けれどいつも寂しくないんです。なぜなら、世界中美術館のある都市に行くので、必ず友達が待っていてくれる。その都市都市に行くと、まず最初に行くところは美術館、なぜなら

そこに友達が待っていてくれるからということで、いつも友達に会いに行く気持ちでわくわくしながら出かけていくんですね。皆さん、これね、大事なことが1つあって、恋人じゃあだめなんですよ。あるいは奥さんとか旦那さんじゃだめなんです。何でかという、恋人や伴侶というのは別れることもあるからね、だめなんです。でも、友達というのは絶対に別れないんですよ、何があっても。本当の友達というのは分かり合っていれば必ずけんかしてももとに戻ることができるし、困ったときには必ず助けてくれる。で、困ったときには助けてあげたいという気持ちになります。ですから、これをちょっと頭に置いておいてください。もう恋人、自分の彼氏とか彼女だともう別れていいんです、さっさと。でも、友達はそういうわけにいかない。やっぱり何があってもあいつが呼んでいるからといって飛んでいけるのがやっぱり友達なんですよね。それをちょっと心に置いていただくと、美術館の見え方というのが急に変わってくるんじゃないかなというふうに思います。

そして、このアートに励まされ、アートという友達に励まされ、友達の家である美術館に通い続けた私がどういうふうにそのアートとともに歩んだかというのをちょっとお話ししたいと思うんですけども、こんなふうにはずっとアートとともに歩いてまいりました。そのメトロポリタン美術館でのブルーピカソ体験が終わった後なんですけど、1987年から何年間か私立の美術館に勤務して、いろんな雑用をしております。あ、ごめんなさい、これはピカソショックの前ですね。その後には先ほど申し上げた民間のアートマネジメントのオフィスに勤務していて、そのときにニューヨークに行ってメトロポリタン美術館でブルーピカソに励まされたという体験があります。

その後、いろいろな御縁がありまして、4年間ほど東京の商社でアートコンサルティングをやるというようなことになりまして、そのうち、これまた御縁がありまして、97年から森美術館準備室、六本木ヒルズにあります大きなビルの一番上にある展望台と一緒にいる美術館ですけども、森美術館という民間の美術館のキュレーター（学芸員）をさせていただきまして、この直前に32歳のときだったかな。早稲田大学の第二文学部で美術史を勉強するために学士入学ということで3年生から入学するんですけども、これもアート熱がいよいよ高まって、この美術史4千年、6千年の歴史を知りたいということで、美術史の勉強を必死にしまして受験をして、美術史の早稲田大学の美術史科に入学しまして、森美術館に行っている間に卒業して、学芸員の資格も取りました。

そして、森美術館準備室では学芸員、展覧会の企画ですとか、美術館そのものをそれぞれ策定、プランニングするというそういう場に身を置いていたんですけども、その間に当時の森美術館がMoMAと5年間提携関係を結ぶんですね。協力関係、協力提供をするんですけども、そのときの人的な交流プログラムの一環として森美術館から私がMoMAのインターナショナルプログラムというところに派遣してもらいまして、半年間だけだったんですけども、MoMAに在籍いたしました。このときの話も本当に話をするとあと1時間ぐらいかかるんですけど、すごく短く言うと、MoMAに行くまで、もともとアートが大好きで、何かアートを自分の創作の中に取り込んでみたいなと思ったのがやっぱり21歳とか22歳ぐらいのときだったんですけども、そのときは自分が小説家になるとはあんまり思っていなかったのですが、絵を描くことが好きだったし、絵を見ることも好きだったし、漫画も描いていたし、小説のようなものも書いていたんですね。ですから、何か自

分はクリエイターのようなものになるのではないかなと。それで、どんな形であれクリエイターになったら自分の創作の中にルソーやピカソや自分の好きなアーティストたちを登場させるということをぜひやってみたいというふうに思っていたのが、大学3年生ぐらいのときだったんですけども、そのときからずっと心の中に何かもやもやしたものがあつたんですが、キュレーターになったりしてすごく忙しくなったので、一旦自分の創作というようなことは横に置いておいて、とにかく森美術館をつくるということに集中していたのが5年か6年ぐらいそういう状態が続きました。

そんなときにMoMAに派遣されて、はたと気がついたことがあって、MoMAに派遣されたということ自体もすごいんだけど、よく考えてみたらMoMAってピカソとかルソーとかゴッホとかいっぱいあるよなと思って、これが毎日見られるってことというふうに気がついて、それから毎日毎日そのモダンアートの部門というかコレクションギャラリーがあるんですね。そこに行くと、ルソーの《夢》という作品とゴッホの《星月夜》という作品とピカソの《アビニヨンの娘たち》という作品がみんな一つのギャラリーに集まっているんですね。それで、それが一遍に見られるというので、もう毎日毎日参して見ているうちに、何かこれは小説が書けるような気がするなと、でもそのときは自分がキュレーターだったから、いつか小説を書けるようになればいいなと思って、せっかくここMoMAにいて資料も山のようにMoMAに、図書館に行くと山のように資料もあるから、「これは頂きだ」と思って、そのMoMAの資料を全部、MoMAのコピー機を使ってがあとコピーをして500枚ぐらいコピーをとって、それを基にして『楽園のカンヴァス』を書いたんですね。だからMoMAには本当に頭が上がらない、非常にお世話になりました。

そのうち、いろんな紆余曲折があつたんですけども、2002年に森美術館準備室を後にしまして、インディペンデントキュレーターとってフリーランスの学芸員になるわけです。場所も持たないし予算も持っていないから何か展覧会をやりたいと思ったら自分でお金を集めてこなくちゃいけないし、自分で場所を見つけなくちゃいけない、なかなかシビアな状況になりながら、自由に自分のやりたいアートイベントですとか展覧会を企画するというのを苦労しつつもやり始めました。

そうこうしているうちに、何か小説が書けるような気持ちになってきて、一回書いてみようかなということを書いた小説がアートとは何の関係もない小説を書いてみまして、『カフーを待ちわびて』という沖縄を舞台にしたラブストーリーなんですけども、これである文学賞に応募しましたところが大賞をいただきまして、気が付いたら2006年に作家になっていたということで、その後2012年に満を持して「楽園のカンヴァス」を出版して、それからずっと後小説を書き続けて、去年は『たゆたえども沈まず』ということで、先ほど御紹介にもありました画商、林忠正と、それからフィンセント・ファン・ゴッホが主人公になった小説も書かせていただきました。もう一つだけエピソードを申し上げますと、この『楽園のカンヴァス』が出版したのは2012年の1月20日だったんですけども、私、この2012年の1月22日ぐらいに鳥取に来ているんです。もうはっきり覚えています。ものすごい雪の日で、後でパネリストで御登壇される鳥取県立博物館美術振興課の尾崎副館長のお宅に寄せていただいて、「いやあ、すごい雪なんですけど、実は私、アートの小説を書きまして」と久しぶりにお目にかかってお話をしたら、「いや、買いました」と言って、もう出たばかりですすぐ買ってくださっていてありがとうございます

ます。そんな御縁もありまして、はっきり覚えているんですけども、そのときにも尾崎副館長に「これは勝負作ですと。これが世の中に認められなかったら、私はもう本当に小説家をやめます」と申し上げたぐらいこれに全てをかけていたという小説で、それが本当に多くの方に認めていただいて、現在までにたくさんのアート小説を書かせていただきました。

こんな作品です、ちょっとこれ私のプロモーションタイムで、さっきからずっとプロモーションしていますけれども、こういういろんなアーティストですとか美術館をテーマにした作品の数々を書いてまいりました。この『モダン』というのは、もう本当これはMoMAが実は舞台の短編集なんですけど、今年4月に文庫になりますので、ぜひ皆さん文庫になったところで構いませんのでお手に取っていただければと思います。我慢できない方は倉吉市立図書館にあらうかと思しますので、そちらで読んでいただいてから文庫も買っていただくとなおありがたいと思います。これが『楽園のカンヴァス』です。こちらが『リーチ先生』というバーナード・リーチをテーマにした作品で、そして最新刊が幻冬舎さんから去年10月末に発売されました『たゆたえども沈まず』と。

この表紙になりましたのは《星月夜》です。ゴッホ兄弟と、それから実在だった画商、19世紀末にパリで活躍した日本人画商の林忠正という人が交流したという、これはフィクションですけども、史実とフィクションを合わせ鏡のようにした物語なんですけど、これもぜひ本当に皆さんにお読みいただきたいので、ぜひぜひお読みいただければと思います。そして、ここでもちょっと今、時間との見合いなんですけどね。すごくおもしろいエピソードあるんですけど話していいですか。今急に思い出したので、これを話すと何か美術館の話ができなくなっちゃって。ちょっとだけお話ししますけど、去年の12月に私、またMoMAにまたちょっといろいろ調査があつて行ってきたんですけど、実は追っかけの調査で、この《星月夜》の調査を改めてしに行つたんですね。それで、役得なんですけども、私、MoMAに在籍していたことがあるので、MoMAで調査がしたいといつても、すぐ許可がおろしていただけるんですね。それで、MoMAのキュラトリアルリサーチセンターといつて、学芸員が専門家が研究したいというときに、いろいろ過去の書類とかを閲覧できるアーカイブなんです。でもこれは非常にハードルが高くて、ある程度の研究実績がないと入れないというところなんですけど、そこに申し込んで、まんまと本当に入れていただいたんですね。それで、この《星月夜》がどういうふうにMoMAに収蔵されることになったかということ、ちょっと調査したくて入つたところが、その経緯は結局のところ、かなり機密文書で公開できないといふことと言われてしまったんですけど、それ以外の資料をすごくたくさん目にすることができて、この《星月夜》が、あるリリー・ブリスというMoMAの創設者の一人だった女性なんですけども、実業家の奥さんで、この方がアメリカにモダン美術館をつくりたいといふことで、発起人になっていろいろな寄附もたくさんされた方ですが、このリリー・ブリスの基金で《星月夜》を買うことになったんですけども、これを購入するのを「これを絶対買うべきだ」といふふうにやっぱり一押しした人がいて、それがMoMAの初代館長だったアルフレッド・バーという人なんです。このアルフレッド・バーという人はものすごい名物館長だったんですけど、この人は、先ほど出てきました『モダン』の中にもこのアルフレッド・バーのことを書いた話があるのでぜひお読みいただきたいんですけども、そのアルフレッド・バーがモダン美術館なので

何をもってモダンとするかというのを定義した人の一人なんですね。そのバーがこの《星月夜》がとうとうMOMAにやってくるというのが、これが1942年のことなんです。ですから、世界大戦がまさに始まったときだったんですけども、もうちょっと調べてみればわかると思いますが、もしかするとね。ナチスがパリを占領して、それで、もしかするとナチスに没収される、あるいは破壊されるというリスクがあったから、パリからニューヨークにこの作品が逃されて、ニューヨークの画商から最終的に買ったんですよ。多分、それをちょっと今、私、いろいろ調べているところですけど、何かがあって、とにかくニューヨークに来たんです。それを買う決断をMOMAがしまして、1942年についてこの《星月夜》がMOMAにやってくるという文書を発見したんです、そのアーカイブの中に。それが何かもう本当に胸に迫る文章で、「この宝がMOMAにもたらされたということを皆さんで喜びたい」と「これはあなた方の作品なんです」とものすごく情熱的に書いている、バーが自分で手打ちのタイプライターで、赤字を全部、自分の赤ペンで入れているんですよ。それを見たときに、「わあ、アルフレッド・バーのこれはもう本当に肉筆に近いものだ」と思って何かものすごく感激して、それでちょっと誰もいないのでカシャッと写真を撮ったんですけど、バーの手紙を初めとしていろいろな手紙がそこで見つかった。それで、すごくおもしろかったのは、この《星月夜》がアメリカのMOMAで公開されてから、もうすごく多くの人たちに愛される作品になって、それでゴッホの知名度がどんどん上がっていくんです。それで、美術館に来館者の方々ビジターの方々が、この《星月夜》に捧げる詩を書いて送ったり、《星月夜》のフレームをあるとき新しく変えたいらしいんです。そしたら、「何で基のフレームを変えちゃったの?」と「あれは私たちの作品なんだから、勝手に変えるな」という手紙があったり、「もう本当にこの「星月夜」をMOMAで買ってくれてありがとうございます」と、「自分は具合が悪かったんだけど、ここに来るようになってすごく元気を与えられた」という手紙がたくさん《星月夜》に寄せられたファンレターがあったんですよ。私は、もうそれを時間をかけて全部読んで、「これこそ美術館だ」と「これこそ本当にアートの持つ力だ」というふうに思ったんですね。

これは、本当に新しくできる美術館の皆さん方にちょっと耳を傾けていただきたいことですけど、アートというのは、そうやって人の人生を明るく照らしたり、あるいは気持ちが暗くなったりする人を癒やしてくれるという、そういう力もあるんだなというのをこの《星月夜》によって教えられたという、長いエピソードですみません、大分時間を食っちゃったんですけども。

さあ、私の私的な話はここで終わりにさせていただきます、ここからが本番ですけども、美術館についてのちょっと私的な見解を述べさせていただきますと思います。

日本は、世界における美術館大国というふうに言うことができます。正確に私、カウントしたことはないですが、風のうわさでは、全国津々浦々に2千館以上美術館があるのではないかというふうに聞いたこともあります。そしてまた、今、大変な美術ブームですよ。まさに空前の美術ブームが到来しているのではないかと思います。

私も最近、アート小説といって、アートをテーマにした小説をたくさん書いていますけども、それを本当に底支えしてくださっているのが、この空前の美術ブームで、美術展に

押し寄せておられるミュージアムビジターの方々が、私の小説もアートなら読んでみようということで読んでくださるといことが本当に増えてきたと。かつては美術館というところちょっと敷居が高いなということで、なかなか行く方もいっしやらないのではないかと。小説だったら読んでみようかということで、小説を入り口にして、では、美術館も行ってみようかということで、最後、小説がまた出口になって現実の美術館に行っていたけるようにということで、私は、自分の小説を入り口であり出口であるといつも言っているんですけども、このアート小説を入り口にして、出口から美術館に行っていたければというふうに思ったのですが、最近ちょっと逆転している感じがして、美術館が入り口になって、私の小説で出口になってくれているような、そういう気がするほどミュージアムをビジットする来館者の皆様、美術愛好者の皆様方が私の読者となっていただいているような、そんな印象を受けます。

こんな長蛇の列、こんなふうにしてまで見たいと、何か非常に私、最近のこの美術ブームを見ていますと、日本人の見物好きというか、もともと持っているそういうスピリットをすごく刺激しているのではないかなという気がします。並んでこそ価値があるみたいのところってありませんか。ラーメン屋さんでもケーキ屋さんでも行列ができてると何かちょっといいんじゃないかと思っているようなところがあつたりして。でも、もともと日本の古来の風習といいますか慣習として、例えば京都の祇園祭なんかでも、屏風祭といって、各家に伝わっている名物の数々を木戸越しにちら見せするという、今でもずっと祇園祭のときに続いていますけども、そういうふうに名物を持っていることの喜び、それを見せることの喜び、それをかいま見ることの喜びというのを、私たち日本人というのは何か持っているような気がいたします。そして、その名物に対する一種の執着といいますか、美に対する見てみたいという心のざわめきのようなものというのは、我々日本人の中にDNAとして刷り込まれているような、そんな気がいたします。

ここでちょっとお見せしたいのが、こんなランキングがございまして、これが2017年展覧会動員ランキングだそうです。第1位、アルフォンス・ミュシャ展です。この「ミュシャ展」、65万7,350人というのがこの行列なんですね。これは国立新美術館のミュシャ展の行列です。そして、第2位が「国宝展」です、これは京都の国立博物館でありましたけども、これも62万人。第3位が「運慶展」です。これは国立博物館で、これも60万人。ちょっと変わったところでは、現代アーティストの草間彌生さんが52万人、信じられないですよ、これは本当に。いやあ、草間彌生さん、すごい。現代アートで52万人行くようになったというのは、ものすごくやっぱりアートの間口が広まったし、見られる方々が非常に許容力を持ち始めたというね。昔だったら現代アートって何、何だかよくわからないといって敬遠する方も多かったんですよ。だけど、今はやっぱり、現代アートというものもおもしろいじゃないということで、すごく寛容してもらえるとこの感じ、受容力が高まったという感じが非常に印象としていたします。

それから、おもしろいところではこの『「怖い絵」展』というのを聞きになられた方もいっしやるかと思いますが、美術史家の中野京子さんという方が、「怖い絵」という非常に興味深い本をお書きになられまして、これは主に西洋美術なんですけども、実は背景を知るとぞっとするようなテーマだとか、物語が秘められたアートワークというものがやっぱり昔からあるんですね。そういうちょっとぞっとするような絵を集めた本を出され

たら、これが大ヒットしまして中野さんが監修されて、中野さんの御著書の中にある作品を実際に借りてきて集めた展覧会だった。これは本当におもしろかったです、私も見に行きましたけど。何がすばらしいかといって、これはテーマの勝利ですね。ちょっと前だったら、必ずモネ展とか印象派展とか、そのときに必ずチラシのキャッチコピーに、モネ、マネ、ゴッホ、ピカソってアーティストの名前を列挙するんですよ。そうすることによって、ああ、じゃ、モネが出ているんなら行ってみようかということで、そのところを売りにしていたんだけど、怖い絵展って何のことかさっぱりわからないんだけど、むしろ何だかわからないけどちょっとおもしろそうだなと思うような、見る人の気持ちを刺激するようなテーマをつくるというのは、これは企画者側の本当に勝利だなというふうに思いましたし、人々の興味の範囲もぐっと広がったというふうに感じます。ということで、それぞれに東京と京都なので、こういう都市部ではすごく大きな動員をすることができる展覧会というのが最近連発されていて、そのところだけ見ても空前の美術ブームなのかなというふうに思います。

では一方で、地方の美術館はどうなのと、このところが実際皆さん一番御関心のあるところではないかと思えますけど、地方の美術館も負けていませんよね。個性的なすばらしい美術館が最近が目立つようになってきました。例えば、皆さん、これはどこの美術館か御存じですか。いらっしゃったことがある方もおられるかと思えます。右のほうは結構有名な美術館で御存じだと思いますが、これは金沢21世紀美術館です。金沢市にありまして、たしか年間100万人行ったときがあったと伺ったような気がしたんですけども、とにかくすごい動員数で、純粋に展覧会だけで100万人というのは無いんですけども、この美術館はすごくおもしろくて、かなり動線が自由にフレキシブルに、入ってきた人が動けるような動線なんですね。それで、パブリックの場所も大きいので、パブリックの場所に結構流れていく人たちがいて、子供たちを遊ばせたり、展覧会は見なくても例えばミュージアムショップに行ったりカフェに行ったりワークショップに行ったりということで、展覧会だけでカウントするのではなくて美術館に来場したというカウントの仕方をして、非常に大きな動員を誇るということで、それはある意味美術館の新しいあり方を一つ提示した成功例として、今、非常に世界的にも注目されている美術館です。しかも、コレクションのテーマ、展覧会のテーマが現代アートにほぼ限っていると、デザインとか建築とかも入れてなんですけども。現代芸術、現代文化ということに限っているという意味では、非常に突出した動員数を誇る、また個性的な美術館になった成功例だと思います。

この左側にある美術館、これ皆さん、御存じですか。知っていらっしゃる方は結構通な方だと思います。何かちょっと似ていませんか、右の美術館と。すみません、私の目にはちょっと似て見えちゃったんですけど。左側は、富山県立美術館です、富山県立近代美術館ですね。近代美術館なのでモダンアートから現代までということで、かなり歴史のある美術館ですけども、そしてまた、大変優れたモダンアートと現代アートのコレクションを所有している、「えっ、こんな作品を持っていたの？」というような作品、びっくりするようなコレクションを持っておられる美術館ですけども、結構長らく動員数がなかなか伸びなくて、どうしたものかというふうに困っておられたというお話も伺ったことがあったのですが、去年リニューアルオープンされまして、金沢まで新幹線も通って富山も停まるということで、金沢に負けてはならないということで富山も近代美術館をオープンさ

れまして、やはりパブリックなアクセスが非常に開かれた場所をつくったということで、屋上なんかも子供が遊べる庭園があったりして、非常に開かれた美術館になっているという。日本の地方美術館では、隣同士のまちなんですが、非常に成功例として挙げるができるのではないかなと思います。

そしてまた、地方美術館でこんな所にこんな美術館が、そしてこんな所なのにこんなに人が来るんだという美術館の好例を一つお見せしたいんですが、それはこちらです。皆さんこれは御存じですか。直島の地中美術館とベネッセアートミュージアムです。こちらからもそんなにアクセスは悪くないと思いますが、お隣の岡山県と香川県にあります瀬戸内の島、直島の中にある美術館ですけれども、私、先月こちらに行って、モネの作品が《睡蓮》が飾ってあるこの地中美術館で、この福武美術財団の名誉理事長の福武総一郎さんと対談してまいりました。もう本当に胸を張って福武さんはおっしゃっていました、「こんな島ですよ」と「こんな島なのに、すごく世界中から人が来てくれるんです。世界中で、ベネッセモデルと今言われているんです」、ばあんっと胸を張っていらっしゃって、でも全部本当なので「いや、もうどんどん胸を張ってください」と「もうどんどん自慢してください」と「こんなにすごい例が日本にはあるんだ」と。しかも、瀬戸内の小さな島ですよ。いらっしゃったことのない方、本当に一度いらっしゃってください、本当に素晴らしい美術館と仕掛けです。瀬戸内の島々をめぐる仕掛けになっていまして、瀬戸内国際芸術祭というのを岡山と香川が連合でやっているんですけども、3年に1回大きな展覧会とそれから美術館をめぐるという期間限定のアートフェスティバルですけども、ここの右下に地図がありますけど、瀬戸内の島々をこういうふうに船で回って、現代アートのインスタレーションを見て回るといふ、そういうイベントですけども、これによって大成功しまして、100万は行かなかったほぼ80万人ぐらいの動員をしたというふうに伺いまして、いやあもう驚きですよ。3カ月ぐらいだったと思いますが、わずか3カ月間、5カ月間ぐらいの間に、世界中からこの瀬戸内の島々をめぐるために人々が来たということで、一種のツーリズムを生んだということで、大変な成功例としてこれもよく世界で紹介されています。

そして、一方で、非常に良質な企画と大変磁力を持った場を持っているのに、全く人の来ない地方美術館というのもあるんですね。ちょっとこれ本当、申し訳ないんですけど、紹介させていただきます。これ皆さん御存じですか？とても小さな美術館なんですけど、これね、やっぱり富山県にあります発電所美術館というんですよ。それで、もう私この美術館、本当にもう小さな宝石のような美術館、富山のちょっと離れたところ富山の新幹線が停まるような大きな駅ではなくて、小さなもう名前も忘れたぐらいなんですけど、小さな駅からまたさらに車でタクシーで20分ぐらい行ったところに、もともと発電所として使っていたすごく雰囲気のあるレンガづくりの工場みたいな建物があるんです。そこを、ごめんなさい、名前も本当に全く忘れてしまいました。町立の文化施設なんですけども、何か町内のたしかそれこそ教育委員会の方か何か、この場所で何か発信できないかということをおアーティストとかいろんな人に相談しているうちに、ここはすごく磁力のある、場所として魅力的なところだから美術館にしたらいんじゃないかということで、いろいろ模索してやり始めたんです。何だかんだでもう10年とか15年とか結構続いていて、1週間に来る人が10人とか、そういう感じ。でも結構そうそうたる現代アーティストが、

この場所はすごいわと言って、誰も人が来なくてもやると言って、そうそうたる現代アーティストの方々がこういう非常におもしろい展示をしていらっしゃるんですね。もうこの場所を生かした、これはサイト・スペシフィックというんですが、その場所に合わせて展示をするということをやられて、それでこの前、私の知り合いのアーティストがここで展覧会をやったときに、初めて私も行ったときに、「ええっ、すごい場所じゃないですか、何でここに人が来ないんですか」と言ったら、「いや、駅から車で20分だったら、誰もタクシーに乗って来てくれないんですよ。」「じゃあ、バスを出したらいいんじゃないですか」と言ったら「いや、それも言ったんですけど、バスになると町をまたいちゃうんで2つの町のマターになっちゃうので耳を貸してくれないんです。それで、じゃ、国に話したらと、それ何か国土交通省がどうのこうのとか言って、とにかくいろいろだめで、人が来ないんですよ。」それで、とっても残念だなと思って、どうしたらいいんだろうと考えながら帰ってきたんですけども、いろいろちょっと私もこういう美術館を助けてあげようと思って、今いろいろ画策中でございますのでそのうち近々どこかで紹介しようと思っておりますけども。

結局、美術館ってどういうところが求められるのかなあと思ったときに、これは私の個人的なオピニオンなんですけども、突出した個性があるとか、わざわざ行ってみたい場所であるというのはすごく重要なことだと思います。というのは今、ミュージアムのビジターの方々というのは非常に洗練されているし、結構もう体験値が高い方々なんですね。行列のできる美術館とか展覧会は結構平気で行くし、平気で行列にも並ぶし、絶対見たいものがあれば何時間かけたって並んで見るんですよ。そういう方々がわざわざ足を向けてみたい、わざわざ行ってみたい場所、それから突出した個性があれば、もう行ってみる価値があるのではないかなというふうに思えるような美術館というのが、私自身はこれからできてほしいなというのはすごく思います。

海外の例を一つだけ御紹介しますけども、こんな美術館があります。これはデンマークのコペンハーゲンの郊外にありますルイジアナ美術館という美術館ですけれども、そもそも個人の美術館で始まったと思うのですが、それがだんだん大きくなりまして、今は公立の美術館になったのかな。非常に優れた美術館として、新しく美術館をつくられる方が必ずといっていいほどモデルケースにされる美術館なんですけども、すごくおもしろくて入り口がこんな小さな家なんですよ、この一番左上これが入り口なんです。何か小さな家に見えるじゃないですか。こんなとこにどんな美術館なのと思って行くでしょ。入るとこういうふうに長い廊下が続いていてこの周りが全部庭園なんです。庭園美術館になっていて、こういうふうに向こう側にはもう海が見えたり緑の中に現代アートの彫刻が点在していたり、非常にすばらしい美術館で、こういう窓から見える風景も含めて借景しているんですね、全部がアートワークなんだということで、もう行くと一日中ここで過ごしたくなるような美術館です。これはちょっと見づらいかもしいんですが、すみません、インターネットから無断借用で、画像が荒れているんですけども、奥へ奥へと長くこういうふうに広がっていく、ずうっと奥のほうに行っちゃってだんだん迷って「ああ、ここどこどこ？」って、もう行けば行くほど次々にすごい作品が出てきたり、おもしろい展示があったりということで、本当にこういうフレキシビリティとか、あるいは驚きというものがあるって、サブ

ライズがある美術館、ここはぜひ行ってみたいなというような個性を持った美術館です。

そして、最後に、もう一つの例をお知らせしておきます。これはデトロイト美術館という美術館がアメリカにありまして、デトロイトというと車産業で有名ですけども、今から5年ぐらい前に破綻してしまった市なんですね、デトロイト市というのは財政赤字を抱えて破産してしまうと。破綻した市が、市の持ち物で債権者にお金を返していかななくてはならないから市の持ち物で一番金目になるものを売却するという検討を始めたんです。それがこの市が誇る世界の中でも屈指の美術館、デトロイト美術館というのがあるんですけども、この美術館に大変すぐれたコレクションがありまして、このコレクションを売却すると。その当時の価値がおおよそ4兆円と言われていて、この4兆円があれば債権者に全部お金が返せるということで、真剣に売却が検討され始めたときに「ちょっと待った！」というふうに待ったをかけた人たちがいた。それが誰かと言いますとデトロイト市民なんですね。「誰のものよ？」と「美術館は、私たちのものじゃない。私たちのものをなぜ市が勝手に売却するの、何で私たちのオーケーなしに売却しようとするの」ということを言い出して、大キャンペーンを行うんですね。そうしましたら、それに賛同したさまざまなコレクターとか大きな大企業とかそして最後はアメリカ国民が大賛同いたしまして、瞬く間にファンドが集まるんです。このファンドを集めて、そのファンドで、このデトロイト美術館をデトロイト市から切り離して財団にして運営すると。だから、デトロイト美術館のコレクションには一歩も踏み入れさせないとか、手を触れさせないというふうに守ったんです。結果的に、そのファンドができたことで美術館のコレクションも守られたし、債権者への返済も始めることができたという非常に奇跡的なことが起こって、私、この話に非常に感動しまして、おとし日本で展覧会もあったんですけど、それを記念して「デトロイト美術館の奇跡」という小説も書かせていただきました。これはフィクションですけど、デトロイトが破産して美術館が閉鎖に追い込まれそうになったのを市民が助けたという、それを物語にしたものですけども、その取材のためにデトロイト美術館に行ってみりました。デトロイトというのは、20世紀の初頭に車産業が非常に栄えたところに大変リッチになった市なんですね。多くのお金持ちが住んでいて、お金がたくさんあるコレクターの方々がたくさん、当時は誰にも認められていなかった前衛アートとかモダンアート、ピカソとかゴッホとかマティスをたくさん買って市に寄贈したんです。ですから、今はもう破綻してしまったんだけど、かつてお金持ちのまちだったので、びっくりするようなモダンアートのコレクションやヨーロッパ絵画の数々、もちろんアメリカの作品も、日本の美術のコレクションもあるんですけども、大変優れたコレクションが散逸の危機を逃れたということで、お話も聞かせていただいて感動しました。

そして、一番感動したのが、この実は右側にあるこの写真、これ、私が撮った写真なんですね。何を感動したかということ、いろいろなアートがあるんだけど、クラシックなこのヨーロッパのクラフトの伝統工芸のギャラリーがあるんです。ここにメディアアートの展示をしていたんですね。テーブルの上に18世紀のテーブルウェアを投影して、もし自分たちがここでミートソーススパゲッティを食べたらどうなるかというシミュレーションが自分たちでインタラクティブにできるという、そういうアートワークだったんですけど、そこに、生後6カ月ぐらいの赤ちゃんを座らせてお母さんが遊ばせていたんですよ。私、それを見たときに、本当に感激して、何でかということ、だって生後6カ月の赤ちゃんに現

代アートがわかると思いますか。もちろんわからないですよ。だけど、いいんです、そんなことは。それは御両親が楽しんでお子さんと一緒にアートを楽しむ、美術館に出かけて行って「あなたは6カ月のときにこの美術館に来たのよ」という思い出をつくってあげているということが、何より素晴らしい。本当に楽しそうにしておられて、私も会話をしたんですけど「時々来るんですか？」と言ったら「子供ができてすぐ連れてきましたと、いつもファミリーで楽しんでいます」というふうに言っていたのを聞いて、いやあ、これは日本の美術館と違うところだなと思います。

私もね、一度「ジヴェルニーの食卓」という小説を書いたときに、モネの話を書いたんですが、日本でモネ展があったときに、『ジヴェルニーの食卓』を書くために集英社という出版社の編集長を連れてレクチャーをするということで、実際に作品を見ながら編集長にレクチャーをするというのを勝手に自分で企画して、集英社の方々を連れて美術館に行ったんです。それで、入り口のところで、モネの《睡蓮》の前で「皆さん、これがモネの《睡蓮》という作品で」という説明を始めたら、おじいさんがとことこと近づいてきて、「あんた、うるさい」と言われたんですよ。「すみません」と言ってそれで編集長たちに「すみませんが、ここから先一人で静かに見てください」と耳打ちして、静かに見て解散したという思い出があったんですが、静かに鑑賞したい方、もちろんいらっしゃいますよね。

だけど、美術館は誰のものなのかというときに、何か私は、デトロイトの人たちや市民の方々やルイジアナ美術館の方々や金沢21世紀美術館に遊びに行っている家族たちに教えられたような気がいたしました。美術館は誰のものと聞かれたら、私ははっきりこう言います「それは私のものでもあり、あなたのものであるけれども、私たちのものなんだ」と。それが何より大切です。ですから、美術館をつくるサイドも「これは皆様のための美術館ですよ」「皆様のために開かれた美術館ですよ」それは言いますよね。だけど、そこに来られる方々が、「いや、この美術館は私たちのものなんです」というふうに御自身で意識を持たれない限りは、それは私たちの美術館にはならないんです。ですから、いらっしゃるときに必ず思っていたきたいのは、これは私たちの美術館だと、これは私の友達の家だというふうに思えるとぐっと距離が近づくのではないかなと思います。

そして、友達が未来永劫伝えられていくすばらしい家なんだという意識で来られた場合には、その友達を少しでも守ってあげよう、その友達を少しでも守り立ててあげようというふうに思うのであれば、どうか私たちの美術館のために入場料を払って入ってあげるといふことも、これは文化財を守るそれから展覧会を企画するための大切な収入源になりますので、喜んで入場料を払って入るようになれば、そのときこそ本当に美術館というのは私たちのものになるのではないかなというふうに思います。

美術館は私たちのものです。誰のものでもありませんけれども、私たちのものだということを中心にとどめていただいて、きょうの話を終わりたいと思います。きょうはどうもありがとうございました。（拍手）

〔休 憩〕

【5. パネルディスカッション】

〈登壇者の紹介等 略〉

○中島教育委員長 では、早速進めさせていただきたいと思います。

原田さん、どうもありがとうございました。非常に個人的な子供のときからの体験から、それから、いろんな作品を通じて御自身がお感じになったことが本当に作家の言葉で語られていて、私も改めて、僕も実際知らない作品が結構ありましたし、いろんなものを見てみたいなというふうに思いました。それから、いろんな美術館の実践をお示しいただく中で、鳥取でこれからできる美術館がこういう形を目指すという方向性なのかなみたいなこともちょっと考えられるような、そういうサジェスションもいただけたかなと思います。とりわけ「美術館は私たちのもの」というところがまさにきょうのテーマに、これはいつも「私たちのもの」ということはこういう講演会でおっしゃっているんですか。

○原田氏 はい、そうです。

○中島教育委員長 ああ、そうですか。別にこれにひっかけたというわけではなかったんですね。

○原田氏 いえいえ、いつものとおりです。

○中島教育委員長 まさに主題のところを突いてくださって、このことについて、美術館というものが税金で建てられた何となく顔のないものになるということではなくて、まさに私たちの、市民のものになるということはどう考えていったらいいかということ、鳥取県の現状、与えられた条件の中でどういうふうに考えていけるのかなということが私たちに課された課題かなというふうに改めて思いました。

そうしたら、まずは今の原田さんからのいろんなお話も踏まえながらですけれども、各パネリストの皆さんに、「こんな美術館に、これからできる美術館がなったらいいな」というようなことを少しお話をいただけたらなというふうに思っています。こちらからの順番で、まずは加藤さんに、加藤さんはまずは美術家、実践者という立場で、初めの田中館長の説明の中でも、創作者のための「つくる」という機能ということが重要な柱の一つに当然上げられているわけですが、創作者の立場を軸にしながらどういうことを御期待されるかということをお聞かせいただけますでしょうか。

○加藤氏 加藤でございます。先ほどのように実践者、絵描きの団体の代表として活動しておりますので、その面から考える美術館はこうありたいなということを思っております。

まず一番初めに、美術館はオープンな美術館にさせていただきたいな、なってほしいなと思っています。オープンというのは、誰も来やすく、そこで活動し、それから展示も楽しんでいただく、そういう基本的な部分を大切に保っていきたいと思います。それから二番目に美術家として考えておりますのは、将来の美術家を育てていきたいなという気持ちを持っております。それは子供たちがこの美術館に触れることによって情緒を養い、美術に触れて、いろんな感情をそこで持つ、憧れを持つ。そういう子供たちが一人でも増えることをこの美術館に願っております。それは、将来の私たちの後継者になる美術家としての役目であろうと思っています。大きくはその2点を柱に持っていきたいと思っています。

活動の上では、まず展示スペースの問題、それから今、県博を利用するに当たって非常に不便を感じておる部分もありますので、そういう面も考えながら新しい美術館がどうあ

るべきかということを願っております。具体的には小さなことの積み重ねですので、ちょっと時間の具合で多少割愛させていただきます。多くはその3つを柱にして美術館がなればいいなと思っております。

○中島教育委員長 なるほど。今おっしゃった展示スペースの問題というのは、それは県民の創作者が作品を発表できるようなスペースが十分に欲しいというお話ですか。

○加藤氏 もちろん創作者の立場もそうですけれど、例えば企画展で、話題になるもの、世界的なものであるとか、そういうものを展示できるスペースを確保してもらいたい。

○中島教育委員長 ああ、なるほど。

○加藤氏 もちろん先ほど言われたような県民ギャラリー、いろんなジャンル別に展示をする展示室、あるいはそれ以外には触れ合う広場がたくさんあったほうがいいと思いますし、もちろん収納もそうでしょう。まず、展示スペースの確保というのをぜひお願いしたいなと。

○中島教育委員長 なるほど。わかりました。ありがとうございます。

では、今度は吉村さんをお願いできますでしょうか。吉村さんもアドバイザー委員会に入ってきてくださっていて建築家のお立場から、そして御出身は倉吉ですね。両方の立場からこういう美術館をとということをいかがでしょうか。

○吉村氏 初めまして、吉村と申します。本日はよろしくお願いたします。

僕は、御紹介いただきましたとおり倉吉市の出身でして、その後建築を学んで、先ほど原田マハさんのお話にもありました金沢21世紀美術館の設計をした事務所に勤めていました。直接担当をさせていただき、その後、自分で独立する場所に金沢を選び、今は金沢で独立して設計事務所をしています。いろいろな経験を経たことで今回アドバイザー委員に加えていただき、地元にとってとても重要なプロジェクトに関わることができ、とても有意義なことだと感じながら今年1年委員を務めております。

こんな美術館になったらいいなという話ですけれども、僕が金沢を見ていてすごく思うのは、公共建築はとにかく人に利用してもらって何ぼというところです。なるべく多くの人に訪れてほしい。でも、僕はこれは観光客だったらあまり意味がないと思っているんですね。地元の人に愛される場所にならないと、そこに建っている意味がないので、やっぱり地元の人に愛される場所、先ほどからもずっと話が出ていましたけれども、自分たちの場所であるという意識、そういうものを持てる場所になるといいなと思っております。行かれた方も行かれていない方もいらっしゃると思いますが、金沢21世紀美術館はプログラムとして美術館ゾーンと芸術交流ゾーンという2つのエリアに分かれていまして、後者の芸術交流ゾーンは、無料ゾーンとして館内をぐるっと回れる、回遊性のある歩き回れるスペースになっています。その無料ゾーンを楽しむ方がとても多いです。また、建物周辺に広場が広がっていますが、外の広場に子供連れで遊びに来ていたりとか、時にはその広場でフリーマーケットが行われたりとか、いろんな使い方をされています。美術館は美術館本来の機能を充実させるのもとても重要ですが、美術館の強みは多用途に利用できる場所だと思います。教育という名目で仕切れば多分いろんな使い方ができて、その多様な使い方の提案を、本当は県民の皆さんがどんどんしてくれるといいなとも思っています。「県民が使い倒せる美術館」になるというのが、僕にとっての、こんな美術館になったらいいなという思いです。

○中島教育委員長 ありがとうございます。とりあえず金沢の実践の中でいうと、今おっしゃってくださった県民が使いこなす、使うではなくて使いこなすというところがいいんじゃないかなと思いますが、例えばどういう具体例がありますか。

○吉村氏 美術館をつくる、設計というか構想する上で多分いろんな視点が必要になると思いますが、例えばある程度大きい公共の美術館、展覧会で著名な作品を借りてこようと思うと2千平米ほどの展示面積が必要になったりします。金沢21世紀美術館は市営なので、市民ギャラリーと呼びますが、市民ギャラリーの床面積は1,500平米近くあるんですね。ほぼちゃんとした美術館の展示室に匹敵する規模の市民ギャラリーがあつて、予約がとれないぐらいプログラムが埋まっています。美術館が運営する企画も入っていますが、それ以外の市民・県民も含めて、書道展であるとか自分たちの作品を展示するために利用しています。使用料が安いというのも公共施設のいいところなので本当に人気で、誰もがその市民ギャラリーで発表したいという、そういう場所になるとすごくいいなと思います。

あと、すみません。先ほどの話で1点言い忘れたことがありました。金沢における自分の美術館としての取組みの一つに「ミュージアム・クルーズ」というプログラムがありまして、金沢市内の小学校4年生、先ほどたまたま10歳という話もありましたけど、10歳というのはすごく多感な年齢で、10歳以下だとアートとかに興味を示さないんですけど10歳ぐらいからが何かいろんなものに興味を示し始めるという話があるんですが、市内の小学4年生を交代で全員招待して、展示作品や建物を説明しながらみんなと一緒に歩くという企画があるんですが、その案内役の人も実は市民のボランティアスタッフなんです。ミュージアム・クルーズ用に毎年公募で、「今年ミュージアム・クルーズのスタッフをやりたい人はいませんか」という感じでどんどん参加者が集まって、子供と一緒に回って作品の説明をしたり、美術館の説明をしたり、すごくいい取組みだと思っています。美術館が全部やっちゃうのではなくて、市民、県民が参加することで成立する、それが自分たちの子供を育てるではないですけども、他人の子供にも自分の子供として見られるような目が出てくるのかなというふうに思っています。

○中島教育委員長 他人の子供ではなくて自分の子供、いいですね。そうですね。どうもありがとうございます。

そしたら、今度は倉吉博物館長の根鈴さんに、この倉吉というエリアに博物館と、もう一つ県立美術館ができるということで、どのような未来像を思い描いていらっしゃるかと、あとは根鈴さんは鳥取県のミュージアム・ネットワークについても関わってくださっているので、その辺り県全体のことについても御発言いただけたらなと思います。

○根鈴氏 倉吉博物館の根鈴と申します。

倉吉博物館が開館して43年ぐらいになります。県立博物館から遅れること1年半ぐらいでしょうか。県内でも非常に古い博物館です。しかも、立地が皆さん御存じのように、打吹公園の一角にあります。打吹山の中腹にあるのでまさしくちょっと高いところにあつて、なかなか入りにくい寄りつきにくいような場所にある。そういった声も届くわけですけども、私の将来の美術館像というのは、やはりふらっと行ってみたいくなるような場所、気負ったり構えたりするのではなくて、行ってゆつたりと時間が過ごせるような場所になればいいなというふうに思っています。

そのためにはどうすればいいのか、もちろん特別展だとか企画展だとか、そういった展示の中身もそうなんです、建築の持つ力、建物が持つ力、これも非常に大きな要素だと思います。アドバイザー委員会の中でも「エッジの立った」あるいは「尖った」といったような議論を今進めておられると思いますけれども、そういった建物でもって人を寄せるといったところも非常に重要な要素ではないかなと思います。建物というのは外観だけではなくて、建物の構造によっては作品の見せ方、展示の仕方、それも変わってきます。そして、県立美術館がつくられるこの場所、2万2千平米の敷地ではありますけれども、その南側には約3万平米の空き地がございます。この空き地は、冒頭の田中館長からも御説明がございましたけれども、国の史跡、古代寺院が眠っている場所でもあります。この古代寺院というのは、今から1300年前7世紀の中頃、聖徳太子が活躍したちょっと後のことですけれども、7世紀の中頃に山陰で初めてつくられた仏教寺院です。山陰で最も早くにこの場所に仏教寺院が建てられた。この仏教寺院は、当時の人が、草葺だったり板葺だったり、あるいはもしかすると竪穴の住居だったり、そういったところに住んでいる人たち、その時代に瓦葺建物があつた。そして、その建物の中には、天を貫くようにそびえ立つ五重の塔があつた。まさしく尖つた建物があつたわけです。土の下に眠っているのも、視覚的に見ることはできないけれども、この古代建築ももしかすると県立美術館の建築のイメージの中に取り入れてもいいのではないかな、そう思います。

それと、加藤先生、そして吉村先生からもお話が出ましたギャラリーの話です、県民ギャラリー、倉吉博物館では市民ギャラリーですが。先ほど金沢21世紀美術館の市民ギャラリーは1500平米ある、倉吉博物館はその10分の1です。非常に広い市民ギャラリーですね。私は、この新たにできる県立美術館にはぜひ県民ギャラリーを充実してほしい。基本構想の議論見直しの中で県民ギャラリーを無くすといったような議論もありましたけれども、絶対そうであってはならない。創作者と鑑賞者の交流の場であり、にぎわいを創出する最も重要な部分だと思います。単なる施設ではなく、私は、それは装置だと思っております。

そして、きょうは倉吉博物館長という肩書とともに、鳥取県ミュージアム・ネットワークの美術館等連携計画検討委員会の委員という形でも出席いたしておりますけれども、これは、平成29年度の6月ぐらいから準備会を始めて、県内の8つの美術展示をしている館長が集まって、これまでもミュージアム・ネットワークという組織があつて、どういうふうな連携をしていくかということやずっと議論はしてきたんですが、今年度は特に美術に特化して連携を強めていこうと、そういった話をこれまで3回ばかりやってきました。ただ、これは館長が集まった会なので、実際に連携をして事業を進めるのはキュレーター、学芸員です、肝はキュレーターです、キュレーターがどう思うか。彼らがほかの館の美術館のキュレーターと一緒にタッグを組んで、そしてそれぞれのコレクションを開示し合つて、どういうことができるのかということやこれから進めていくということになります。ですから、県立美術館はこの倉吉の場所にできますが、県民の美術館なので県内あらゆるところで美術が享受できるようなそういった連携事業を進めていきたいというふうな考えて、今、議論を進めているところです。

○中島教育委員長 どうもありがとうございます。

初めの石田会長のお話でもありましたが、あえて地域エゴというような言い方をされて

いらっしゃいましたけれども、決して倉吉のためだけということではなくて、やはり県全体のために美術がどういうふうに関与できるかということを考えていくということがもちろん主要なミッションとして入ってくると思います。今、おっしゃっていることは、どうやって、それこそ米子市美術館なんかの話も実はさっき加藤さんともしておりましたけれども、県内各所の美術館とか博物館とどういうふうに連携しながら、県民全体のアクセス権といいますか、いろんな意味での美術と触れ合う機会というのを保障していくかということが、極めて重要な課題の一つにこれから焦点化されてくるものの一つだろうなと思います。

それから、県民ギャラリーの必要性というのもやはりなるほどなと思ってお聞きしました。それから、やっぱり建築の問題ですね。建築の問題が出たから、一回、吉村さんに戻りますか。

○根鈴氏 私は、あるところで吉村さんの話を聞いたことがあるんですが、吉村さんは倉吉の出身なんですね。この方はやはり倉吉に新たにできる建築に非常に思いを寄せておられる。私たちが自分が住んできて暮らしてきたこのまちに何ができるか。この会場には倉吉市民の方ばかりではないと思いますけれども、平成36年に開館する、もし倉吉市民であれば私たちはその建物をずっと見続けていく、少なくとも50年近くは見続けていく。ですから、やはり建物はとても重要だと思うんです。

私が吉村さんに期待をするのは、彼が倉吉市民であるから、倉吉市民にはこういう建物がふさわしいよな、あの景観にはこの場所にはこの空間にはこれが必要だよなというものをぜひ提案、発想していただけるだろうと思って、大いに期待をしております。どうぞ。

○中島教育委員長 高まる期待ですけれども、さっきお話もあつたんですが、あるいは初めの原田マハさんのお話の中でもあつたんですが、優れた美術館というのは単純にそのデザインがすぐれているということだけではなくて、こういう美術館なんですというコンセプトがあつてそれがうまい形で可視化され、例えば21世紀美術館でも開かれたというコンセプト自体が建物によって可視化されているみたいなことがあると思うんですけれども、一方で、建築家にある種むちゃ振りの「建築家さん、いろいろおもしろいものを考えてよ」みたいに振られちゃうようなケースも多いのではないかなというふうに思うんですけれど、今、もし吉村さんが例えば構想されるとしたらどういうことをポイントとして考えるのかな、そういうことはおありですか例えばの話ですが。

○吉村氏 ちょっと変化球で来ますね。正直、自分があそこに建てるならという視点で見たことは今のところないんです。

○中島教育委員長 なるほど。

○吉村氏 ごめんなさい。ただ、先ほど根鈴さんの話にあつた大御堂廃寺、実は僕、倉吉で生まれ成徳小学校なので博物館もすぐ近くにあり、この辺は本当に地元エリアなんですが大御堂廃寺のことは知りませんでした、ごめんなさい。

○中島教育委員長 ああ、倉吉の人もそうですか。

○吉村氏 はい、ごめんなさい。僕は、特に関心が無かったのかもしれない。でも、実は史跡というんですか、鳥取県中部にはすごくたくさんあるんですよ。大御堂に限らずですが、実は歴史的に重要な史跡が身近にあるということも、本当に申し訳ないですが知らなかったんですね。今になってみれば、ああ、すごくそういう文化というか、しっかり残

っているんだなと思って、あそこに建てるならば大御堂のことは無視できないですよ。

なので、根鈴さんのとがった建築というのは駄じゃれかもしれないのでちょっと置いといたとしても、物理的にとがっている必要はないんですが、大御堂に限らずですが、周辺とのなじみ方というのは建築計画にとってとても重要で、建物がどう構えて建っているか、もしくは入り口をどこにとるかということだけでも建物の計画というのは全然変わってきてしまうんですね。展示室の配置含め、展示計画にも大きく影響してきます。なので、建築、実際建物がどういう形で建つかというのは、本当にすごくいろんな要素に関わってきちゃうので、デザインと言われると、目に見える形や造形的な要素をイメージされると思いますが、僕としては金沢21世紀美術館もガラス張りの丸い建物で、全国プロポーザルで選ばれた案なんですけど、丸い外形は別に奇をてらったわけではなくて、当時の金沢市長、山出保さんという方が「かっぱう着を着て来られるような場所にしてほしい」とおっしゃっていたんですね。「金沢の街中から、大学は郊外に移転してしまい、街中に人が少なくなってきた」と。「街ににぎわいを取り戻したい」というのが最初の言葉だったんです。そのための美術館を建設したという話。その中のSANA Aの提案は、360度正面である円というモチーフを使って、いろんな方向いろんな地域を結ぶような場所となるような提案をしたことがポイントなんですね。なので、ガラス張りであることが新しいとかそういうことではなくて、どういうコンセプトで計画するかということが重要なので、最初に山出市長が言われたような強い指針を、県としては何か提示して、それを建築家がどう解釈するかということとその建築の提案コンセプトが引き出されるのだと思っています。最初の強く大きなコンセプトというか、それがすごく重要だなとは思っています。

○中島教育委員長 ありがとうございます。

現状、先ほどの田中館長からの説明もあったように、「つくる」ということが一つ大きな柱として出てはいるんですけども、もう一段何かしら具体的なコンセプトの提示ができたらいかなということ、私としても何かちょっと考えたいなというふうに思っているところです。

ちょっと今度は切り口が変わりまして、この美術館の中で、学校教育と、あるいは社会教育とどのように関わっていくかということが、かなり重要なポイントになっています。その中で、いろいろ御検討をいただいている富山さんからお願いいたします。

○富山氏 皆さんこんにちは。小学校のほうからやってきました。

皆さん専門家なので、私は教育のほうの専門家ではありませんけれども、こういった美術関係の専門家ではないので難しい話はできません。ただ、実はこんな美術館になったらいいなということがあったら話してくださいということで来させていただきました。私の立場は結局小学校の教員ですので、せっかく立派な美術館を鳥取県に建てていただけるのなら、こんなことをしていただけると嬉しいなという夢を少しお話できたらいいなと思って来ました。

美術館にいろんな企画展だとかに行かれていますと思いますが、あんまり子供の姿を見た記憶はないと思いませんか。大人はたくさん見るんですけども、子供たち特に小学校中学年3年4年から下の子供たちを見かけられたことは余りはないのではないかなと思います。ということは、小学生にとって美術館はやっぱり遠いんですね。そこを何とか縮めたいなという思いがあります。それで、ぜひこんな美術館になったらという2つ思いがあって、

1つは、子供たちのアートの入り口になったら嬉しいなと思っています。何よりも県民の美術館ですので、ぜひ一生の間に1度は行ったことがあるよ、そんな美術館になったらいいなと思います。放っておくと興味のある方は何度でも行かれると思います。でも、本当に縁がなかったら興味あっても縁がない。もしくは興味がなかったらもしくは興味を生み出す場がなかったら1度も行かずに終わってしまうということもあり得ますよね。そうではなくて、鳥取県民のみんなの美術館なので、ぜひ小学校の間に全員が1度は行ったよ。先ほど吉村さんのほうからも、金沢の取組みで、ミュージアム・クルーズという取組みがあったと思いますけれども、できれば鳥取県も予算をつくっていただいて、小学校4年生、先ほど10歳と言われました。ちょうど10歳ですね。全県下の4年生が毎年来る美術館に来る。そして本物と向き合って帰る。それがきっかけとなって、「あっ、美術館に行ったことがあるよ」「もう一度行ってみようかな」。それがいつになるかわかりません。中学生、高校生、社会人になってからかもしれないけれども、でもいつか「行ったことがあるよ、ぜひ行ってみよう」そんな場所になったらいいなと思っています。そういった入り口としての美術館になったら嬉しいなと思っております。それからもう1点は、最初のお話の中にあつた、県民の創造性を育てる場所というお話がありました。そことの関連で考えますと、子供たちの創造性の育成の場であってほしいなと思っています。本物の作品を見ることでも当然、創造性の育成というのはできるんですけども、そうではなくて、小学校1年生でも2年生でもといったら、なかなか美術だとか芸術だとかちょっとわからないことがあります。そこで、ワークショップのような場をずっとシリーズもので持っていたりとか、そういった中で子供たちが作って触れて楽しむ、そんなワークショップが常に行われている。暇になったら「美術館へ行って何か作って帰ろうかな」そんな場所であってほしいなと思います。なぜ美術館かというと、物を作ったりするんだったらどこでもいいですよ。ここでもできます、会場を設定すれば。それをなぜ美術館か。本物が飾ってある美術館に行って、隣の部屋の展示室に行って見て創作意欲をかき立てて、戻ってきて自分の作品に向かう。困ったら、ここをどうしようかなと思ったら、もう一度展示室に行くと。「ああそうか。ここはこういうふうにしてあるんだ。こんなふうを描いてあるんだ。こんなふうにつくってあるんだ」自分なりに学んで見習ってまた自分の作品と向き合う。そういった美術館、本物がそこにある値打ちというのはそこにあるのではないかなと思います。ああしなさいこうしなさいとつくり方を教えるのも確かに大事かもしれませんが、やっぱり技法にしても心で感じる部分、そういったものも自分で学んでいって自分の作品を作っていくとか、それから、作品とは言わなくても、そういった色と形を楽しめるそんなワークショップが子供たちのどう創造性をかき立てる、そんな場になるのではないかなと思っています。ですから、ぜひそんなワークショップ的な、イメージはなかなかできませんけども、そんな場所であってほしいなと思っています。

ただ、先ほど言った入り口だとか、創作だとか、ばらばらにやってもなかなか効果がないので、皆さんブックスタートという言葉をお聞きになったことがあるのではないかなと思います。美術とは関係ないです。図書館のほうで、幼児期に子供に本を読んで聞かせる、そのブックスタートという言葉があります。それは、小さいときから本を読んで聞かせる、いろいろ検証がなされているんですが、読書習慣が身につくゲームをする時間が減る。それから、保護者が図書館を使う機会が増える。生活習慣、学習習慣が変わる。そう

いった効果も検証されています。それと同じように、せっかくの美術館です。アートプログラムなるもの、ブックスタートでなしにアートスタートのような入門、一緒にみんなで見て回る、それから何かそこで創作活動をする、そういったものを複合的にあわせて、アートスタート、もしくはアートスタートプログラムのようなもので鳥取県の子供たちを育てることができたらいいなと思います。

何年後か子供たちが10年経って、4年生ですから10年経つと20歳ですよ。10年後に、またその子たちが次の美術活動を始めてくれる。自分が作るかもしれませんが、誰かを連れてくるかもしれないし、そういった広がり長い時間はかかるかもしれませんが、そういった美術館であってほしいなと思っています。

○中島教育委員長 ありがとうございます。

富山さんは図工を割と学校でお教えになっているということなんですか。

○富山氏 美術の専門家ではないです。専門家ではないですが、縁あって図工をずっとやっておまして、教員になったときから、それこそもう30数年になりますけれども、運よくというか、運悪くといえますか、図工と関わらせていただいて楽しませていただいております。

○中島教育委員長 今の時代の中で、それこそ先ほど御指摘もあったように、ネットとかゲームというのがどんどん子供たちの時間に入ってくるという状況の中で、図工の意味というのはどうなのかなと、僕、時々思うんですね。一方で、図工の時間を減らそうみたいな動きもあつたりもするじゃないですか。どうなのでしょう、子供たちにとって図工はということでしょうか。

○富山氏 今、図工の時間って、ここの会場におられる皆さんが小学校のときに、図工の時間はありましたよね、きっとね。大体週2時間ぐらいあったと思います。今、週1時間ありません。それぐらいもう図工の時間が削られて、1学期に1枚描ければいいほうです。それぐらい、子供たちが作品と向き合う時間がなくなっているんですね。

今、中島委員長さんも言われましたけども、子供たちは確かにコンピューター等でいろんなものを作ったりということはできるんですけども、やはり子供たちが自分の作品を目の前にして立ち止まるときがあるんですね、ぱたっと止まることがあるんです。頭と心がすごくフル回転しているんだけど、この色をどうしようか、ここをどうしようかと作品と格闘している、そんな場面は子供はぱたっと止まります。これが本当の子供の育成じゃないかなと思うんですね。決してパソコン画面が悪いわけじゃないんですけども、やはりその中で心を動かし頭を動かし手を動かし、その時間その作品づくりは大事なかなと思います。

○中島教育委員長 ありがとうございます。

では、今度は尾崎副館長にお聞きしたいんですが、今、皆さんからいろいろ御提案いただきました。尾崎副館長を中心としながら、基本計画が今進んでいるところですけども、お感じになったことをお聞かせいただけますか。

○尾崎副館長 一応、県立博物館副館長ということでタイトル出ていますけど、むしろ私としては、個人的に学芸員を30年以上続けてきた経験からちょっと今の話につなげたく思うんです。最初に原田さんの非常におもしろい話を聞きまして、その中で幾つか美術館を挙げられましたけど、美術館に幾つか類型がありまして、最初に大原美術館と言われま

したね。その大原美術館というのはコレクションを常設でやって、すごいコレクションがあるという、コレクションを見に行くという美術館で、これはヨーロッパ型の美術館、ルーヴルとかロンドンのナショナルギャラリーもそうなんですけど、そういう美術館があります。それから、2番目に原田さんが研修されたMoMA、ニューヨークの近代美術館がごございますね。これはどっちかと言うと作品を借りてきて展示をする、展覧会を主体にしたテンポラリーな展覧会を中心にした美術館です。これが第2世代という美術館だと思います。次に名前の上がった金沢21世紀美術館とか直島の例が出ましたけど、これはどっちかと言うと、もちろんすごい作品あるんですけど、その場所に行くということが非常に重要な、第3世代というかそういう美術館だと思うんですね。

それで、我々が今つくろうとしている美術館は、同じことをやっても始まらないと思うというか、恐らく都道府県で一番最後の県立美術館になりますから、新しいことをやらなきゃいけない。そのときの一つのキーワードが、今、皆さんおっしゃいましたけど、やっぱり人との関係だと思います。それで、来場者、それから関係する人、来場者だけでなく美術の好きな人、そういった人たちと関係をうまく構築していく美術館というのが、新しい4番目の類型になるのではないかというふうに私は考えています。ですから、ラーニングセンターというものを言っていますが、それもその一つの手だてですし、さっきから話が出ています、例えば小学生を連れてくるといったこともありますし、そういったことを模索していく必要があるのではないかと思います。

それと、もう一つ思いましたのが、やはり原田マハさんのお話の中で非常に私も強く共感したのが、例えばシャヴァンヌですとかピカソの絵の前で感動して泣く、涙が出るという体験、私は涙こそ出したことはありませんが、それに近い体験というのは何度もあります。ということは、美術との出会いの場をつくるというのが美術館の一番最大の要件で、それがやっぱり一番基本的な関係になると思うんですが、それは実は世界的な名画の前だから感動したのではないと思うんですね。美術というのはそういうものではなくて、真剣につくられた作品であれば、どんな作品であってもその前で涙するぐらいの潜在力を秘めていると思うんです。

ですから、例えば倉吉につくるということでもものすごい集客ということは初めから見込めないことはわかっているんですけど、そういう雑踏の中で見るのではなくて1対1で作品に出会って、そこで本当に内面を変えるようなそういった体験をできるような美術館、それは、今の博物館のコレクションで十分可能だと思います。そういった場所をきちんとつくっていくということが必要ではないかというふうに思いました。以上です。

○中島教育委員長 ありがとうございます。

ちょっと私、尾崎さんにできたら教えていただけたらなと思ったことがあって、鳥取県の、現在の県立博物館が所蔵している作品というのがあるじゃないですか、郷土作家とか世界的なものとか。そういう意味でいったときに、とりあえず収蔵作品というレベルで見たときに、美術館でこれは結構、今までの言葉でいけばエッジが立つというか、売りになるというような部分というのは、どういうことが考えられるんですかね。

○尾崎副館長 端的に、例えば前田寛治ですとか辻晋堂、これは確かに地味な画家ですし、地味な立体作家だと思うんですね。それで、特に前田寛治は短命だということもあって、作品がさほど残っていないということがあります。ただ、やっぱりきちんと見ればすごく

私はいいい作品だし、実際にほかの美術館からいらっしゃった方が要するに専門家の方がしっかりご覧になって非常に感銘を受けたということをよくおっしゃいます。それで、今までは展示をしていなかったわけですね、常設が狭いために。これが、今度の新しい美術館で例えば前田寛治の部屋ができて、常に前田寛治の名作がそこに並ぶようになると。そうすると、これは地中美術館のモネとまでは言いませんけど、すごく潜在力はあると思っうんですね。

我々が逆にそういったことを感じるようにならないと、どうせ小さな県の美術館だから大したものを持っていないというふうに、そう思いがちなんですけどそうではないと。本当にすばらしいものを持っているということ、我々の意識を変えていく、それもやっぱり、さっき言った人と美術館のつながりということ、これを重視していく一つの意味ではないかと思っいます。

○中島教育委員長 なるほど。そうすると、さっきの作品と出会っている時間を大事にする、1対1で静寂の中で出会えるというようなこととつながっていくということになるわけですね。なるほど。よくわかりました。ありがとうございます。

では、原田さんにお聞きしてもいいですか。

○原田氏 はい。

○中島教育委員長 作品の力、尾崎さんが御整理いただきましたけれども、コレクションの力のある美術館があるとか、それから日本だと例えば国立新美術館なんかはコレクションを持たずにといいことでおやりになっています。そういう作品を中心としてといところから、いろんな形での現代的な教育との関わりだとか、周辺の例えばカフェなんかも含めて空間をどうつくっていくかといことで、いろんな美術館の魅力をつくるといことが、方法が模索されているといところがあると思っいますけれども、私たちも構想する中で、何が鳥取の美術館の強みにできるのかなみたいないことをやっぱりすごく考えるところが正直言ってあるんです、それを模索しているところすけれども。今の皆さんのお話とかを踏まえながら、もし何かお感じになっったこと、ざっくりとした質問で恐縮すけれども、お聞かせいただけますか。

○原田氏 そうですね。やっぱり地域の美術館として、地域の魅力ですとか可能性とか、潜在能力といものがあると思っいます。ポテンシャルがあると思っうんですが、それを引き出せる起爆剤になるような、そういう美術館になるといいなと思っいますし、DESTINATION化とよく言っいますけども、ここがあるからわざわざ行ってみたいといふに思っうような場所であるといいいなと思っいます。

もともと、例えば金沢の場合なんかだと土地のポテンシャルが非常に高かったといものがありますよね。小京都であると。町並みも美しいし食事もおいしいいろいろな観光スポットもあるといことで、潜在力が非常に高い場所ではあっったところへ新幹線が通っったといものもあって、いろいろな相乗効果も生まれて、金沢21世紀美術館モデルみたいないものができっったと思っうんですけれども、ただ私は、それを金沢でしか実現し得なかつたといものは全くないと思っていまして、私、国内外の美術館にあっちこっち行っていますけど、日本国内のローカルな旅といものは本当大好きで、それでそれぞれの土地にその魅力といものはあると思っうんですね。今、尾崎さんも、この美術館にどんなに頑張ってもそ

んなに人が来ることはないという逆に自信を持っておっしゃっていましたが、私は「いやいや、そんなことはなくて」とちょっと押し戻したいんですけども、60万人は仮に無理だとしても、この地域のポテンシャルですとか魅力というものを発見する装置になる可能性というのは十分あると思いますし、逆に今、鳥取県民そして倉吉市民の皆さん方は、「え？、倉吉のどこがそんなにいいの」というのが、やっぱり内側にいらっしゃると見えない部分が多いのではないかなと思うんですね。

私、いつも旅人で、あっちこっち旅をしまして、もう何げない風景ですとか、人々の営みを感じられるような小さな場所というのが大好きなんです。むしろ都会ですとか、ほかの外国から来られる方々というのはそういうところにこそ魅力を感じるし、特に伺ってみると、米子空港のほうには、例えば韓国とか香港のほうからもダイレクトで直通便が飛んでいるということで、アジアからのツーリストを招き入れるということも可能性としてはありますよね。彼らが滞在してお金を落とすというように、やっぱりそのプログラムをつくってあげたいと思うんですが、大切なのは点を面にするところだと思います。先ほどちょっと最後に御紹介した火力発電所美術館のようなところは、もう本当に小さな点でしかない。これを線で結んで面につくることができたなら変わることは絶対あると思うんですね。ですから、鳥取県下の美術館も手を結び合って、さまざまなイベントですとか協力体制をつくるというふうにお考えのようですが、もちろんそれはぜひやっていただきたいことですし、プラス、倉吉という「美術館のまち」を面で捉えるということも、市民、県民の皆さんで町おこしをしていただきたい。やっぱり、「せっかく美術館に来たんだから、じゃあ、どこでち餅が食べられるの」とか「どこで骨とうが買えるの」とか、美術館がなくても私は来ましたし、お金を落としました、大したお金じゃありませんけど。でも、そういうことができるポテンシャルのある土地なので、そのまちの宝というんですか、そういうものをぜひ御自分たちで発掘されて、それをぜひ「つなぐ」という努力をしていただきたいですね。それはやっぱり、まちが活性化したら皆さんも多分嬉しいと思うんですね。直島なんか本当に、福武名誉会長がおっしゃっていましたが、「何が嬉しいって、島のおじいちゃん、おばあちゃんがものすごく笑顔が戻った」と。「暗くて、どこにも出かけずにいたんだけど、ものすごく若い人たちが来られて、外国からも注目されるようになって、誇りだ」というふうに現代アートは誇りだと。最初は何だか訳わからないと言っていたんだけど、それを誇りに感じられるようになったということも伺ったときには、やっぱりアートの力というのはそういうものを秘めているんだというふうに思いました。

それから、私からの個人的な注文なんですけど、特に教育というお話も出ましたが、とにかく一流のものを見せてあげてほしいですね。それで、中途半端な手づくり感のものは、ごめんなさいやめてください。そういうものも大事ですけどそれはそれとして、温かみを感じられるというもので見せたり一緒につくったりということこれはとても大事ですが、やめてくださいというのは冗談なんですけど、一流のものというのはやっぱりそれなりに、アーティストたちやキュレーターたちがお金も労力も時間も命も削ってつくっているものなんです。この迫力というのは本当に半端ではないです。それは何も「じゃあ、それはモネとかゴッホなの」というとそういう訳ではなくて、もちろん地元にも一流の画家の方々、一流の彫刻家、工芸家の方々、音楽や現代アートに関わっている方々がたくさんいらっしゃると思います。そういう方々が作品を提供するなり、見せ合ったり、子供たち

に見せてあげるという体験をさせるというのは非常に重要です。そこにお金はかけてもいいと思います。

あと、総花的なものにだけはしないでいただきたい。いろんな方の意見を取り入れるとどうしても総花的になっちゃうんです、あれも入れるこれも入れるというふうになっちゃって。

○中島教育委員長 そうですね。

○原田氏 でもそれは、最終的にふたを開けてみると、どうしてこうなったのというふうに絶対なるんですよ。もう本当にそれが危険で、そうならないようにと思って私もちょっと見守らせていただきたいんですけど。

○中島教育委員長 はい。

○原田氏 とにかく総花的なものは絶対だめです。とにかく個性、「何でこんなものが？」というものでもいい、個性がある、「これが倉吉の答えなんだ」と「一つのソリューションなんだ」と。いずれ世界に「倉吉モデル」と言われるぐらいのものにしていただきたいです。でなかったら、やる意味がないですね。だから、やらなかったらやらなくてもいいと思います。その予算は別のことに付けていただいてもいいと思うので、どうせやるなら一流のもの、どうせやるなら世界に誇る倉吉モデルをぜひつくっていただきたいですね。それをこれからしっかり見守らせていただきますので、ぜひつくっていただきたいと思います。厳しいことを言ってすみません。

○中島教育委員長 ありがとうございます。力強い激励の言葉いただきましてありがとうございます。

実際、アートの世界でもとりあえず倉吉ということに限って言うと、いろいろ行われていることもあって、アーティスト・イン・レジデンスなんかをずっと一生懸命、明倫地区を中心にしておやりになっていたりと、あとは障がい者アートの展示の拠点「くらよしアートミュージアム無心」があったりとか。あと先ほどアートスタートというのをおっしゃっていましたが、アートスタートをずっと「特定非営利活動法人こども未来ネットワーク」というのがおやりになっていたりとかというので、いろんな蓄積はあるんだと思います、そういうものをつないでいくとか。

あるいは、大御堂廃寺跡のことは確かにどうやって生かせるのかというのは、大御堂廃寺を活かせれば、県内全体のたくさん遺跡があるんですよ、そういうものとどうやって現在の美術というものをつないでいけるかということが、うまく物語りが描けるとすごくすてきだなというふうに思って、それを探せないかなというふうに考えているところです。

○原田氏 ちょっと1点いいですか。

○中島教育委員長 はい。

○原田氏 今お話を伺って思ったんですが、地方の美術館であまりうまくいっていない、どことは申し上げませんが、せつかくいいものを持っていていいプログラムをやっているいいコレクションも持っているし学芸員の皆さんも熱意を持ってすごくやっぴりやるのに、なかなか知られないという問題があるんですね。それは何かというと、やっぱり発信力が弱いんですよ。アウトリーチというんですけども、そのアウトリーチのアイデアがちょっと薄い。今インターネットがこれだけ発達して、誰でも自分でモバイルを持っていますよね。届こうと思ったら個人にダイレクトに届く時代なんですよ。それをまだちょ

っとうまく使い切れていないというのが多いんじゃないかなと、私、客観的に見て思っています。それで、実はもう多くの人に向かって発信するというマスの時代ではなくて、ワン・to・ワンの時代にもう今はなっているんですよ。だから発信するということがどういうことかということ、やっぱり県としてお考えいただくいいチャンスなんではないかなと思いますね。今おっしゃったようなプログラムって、実際、私知りませんでしたし、そんないいことをやってらっしゃるのにもったいないじゃないですか。だから、それを本当に発信していくこと、その発信する方法ですよ。そのアウトリーチする方法というのを、そこにこそ予算を付けたらいいんじゃないですかね。それはすごく大事。だからやっぱり、箱は立派につくったけど結局発信できなかったら「誰も知らない」というふうになっちゃうから。

○中島教育委員長　そうですね、はい。

○原田氏　本当に何か御自身たちのメディアを持つとか、私も自分の小説というのは自分にとってのメディアなんですけども、これを通して知っていただくことというのはたくさんある。だから、林忠正についても、先ほどの『たゆたえども沈まず』でも、ほとんど日本人は知らなかったけど…。

○中島教育委員長　知らないですね。

○原田氏　今回の小説で掘り起こすことによって、少なくともその本が売れた分だけは皆さんは読んでいただいて知っていただいたという一つのメディアになったというふうに思いますので、メディアとその発信、アウトリーチということに県も市もちょっと予算を付けていただいて進めていかれると、しかも早い段階から事前にちょっと広めていくという事はぜひなさってもいいんじゃないかなと、すばらしいものをお持ちなので。

○中島教育委員長　まさにきょうのこの会のテーマになるところを、もうずばって言っていただいて本当にありがたいなと思いますけど…。

○原田氏　すみません。

○中島教育委員長　要は、平成36年に向けてつくっていくという中で、36年からスタートということではなくて、36年までにできることもたくさんあるだろうということで、それをみんなで方法を考えてちょっとずつやって、それをつなぐ方法を考えていきたいというのがまさに我々が考えているところです。ありがとうございます。

もう1点皆さんにお聞きしたら、ちょうど4時ぐらいになっちゃうかな。「美術を通じて地域がこのように変わったらいいな」というようなことを思われる部分があればお聞かせいただけたらなということで、皆さんにちょっと考えていただいているんですけども、加藤さんからお願いしてもよろしいでしょうか。

○加藤氏　私は直接の作家でございますのでなかなか言いにくいところがあるんですが、美術館という視点から考えると、そこに人が集まる、にぎわいを持つ、それが一番大事な部分だと思っております。それから、先ほど原田さんの面になるべきということ。ここには白壁土蔵群や、この隣は大きな施設がたくさんあります。そういったところとの連携。それから、近くには漫画をテーマにしたところもあるわけですので、何かそういうところとの面ができれば経済効果も非常に上がるのではないかなと思っております。

作家としては、まずにぎわいを持つ、それから美術に触れる人をたくさんつくりたい、

もうこれに尽きると思うんですね。建物は、例えばランドマークのようなものになってほしい。と言うのは人に興味を持ってほしいということだと思います。それから、実際にやる上では、ワークショップであるとか、それから先ほどの移動美術館構想であるとか、そういうものがその助けになると思っています。まず、美術館としては、展示ができる十分なスペースとそれからそこに触れ合う人がたくさん来てほしい。それに尽きると思います。

○中島教育委員長 なるほど。加藤さん、ずっと活動されている中で、いわゆる美術人口というんですか、美術を描く人、やる人というのは減ってきているんですか。

○加藤氏 そうなんです。私の団体は100人ちょっとの団体ですけども、実際、一番初めにできたのは22年前にできたわけですが、そのときには200人を超していたんです。それとともに高齢化という状況が作家の中にあって、20数年になれば、そのとき入った人でも例えば40代でも60代、もちろん50代でも70代というところで、なかなか家庭環境でできないというかたちがありました。では、その代わりに若人たちが入ってくるかいというと、今頃の若い人はどっちかというところとパソコンに向かってアートを作るという部分、あるいはそれからアニメーションであるとかイラストであるとかそういう部分にたくさん興味を持っておって、実際に筆で絵を描く人口は多少少なくなっておる部分が現状です。だから、そういうことに対してでも、例えば筆で絵を描くというのはなかなか初心者は難しいところもありますので、今アクリル絵の具というのもあって割合簡単にできるんですけど、例えば油絵でありますと、その手法が随分幅が広い部分があります。

それから、日本画家が今、激減しております。それは、日本画を描く工程が非常に難しいんです。下絵から写しとって、それをまた顔料、石を砕いたようなものに、にかわをつけたやつでくっつけていって絵をつくる、なかなかその工程が大変だと。その辺によって身近でないものに変わりつつあるんです。大体そういう状況です。

○中島教育委員長 なるほどなるほど。おそらくどのアート分野も比較的、全体の人口が減少するというのもあって、あるいは団体に所属する人が減ってきているというのは絵画に限らないことだとは思いますが、今、美術ラーニングセンターということを行っているときに、美術を学ぶのではなくて美術を通じて学ぶというような言い方をメインにはしているんですが、ただ一方で、美術を学ぶということももちろん重要な機能なので、そういう人口が増えていくというのは確かに意味があることだなというふうにお聞きしました。ありがとうございます。

○加藤氏 美術ワーキングのところは非常に期待しています。もう本当に、子供たちが美術に触れて、一人でもこの道に入ってほしいと思っています。

○中島教育委員長 なるほど。ありがとうございます。

では、吉村さん、お願いできますか。

○吉村氏 美術を通じて未来のこの地域がこのように変わったらいいな、という話ですよ。大変失礼な話ですけども、平日の真昼間に開催ということもあり、僕は正直、今日これだけ多く方が来てくださるとは思っていませんでした。でも、この場にこれだけたくさんの方が来ているということは、もう既にいろんなことが変わり始めていると思っています。というのも、美術館の建設は決まったけれども、まだ姿が見えない段階ってすごく難しいと思うんですよ、美術館について考えてみよう、と言われても、何を考えれ

ばいいのかよくわからない、というのが一般的な反応です。ですが、ここに来てくださっている方、別室も満席だと聞いているので、こんなに多くの方が興味を持って来てくれていたというのが、本当にすごいことだなと思っているんですね。

僕は美術を通して柔軟な思考を身につけるとというのが重要なことだと思っているんですけど、何か決まった見方をするのではなくて、いろんな美術作品というのは、作家の考えていることをイメージしたり理解しようとしたりという見方もありますし、そこからまた全然別のものを発見するというような行為もあると思うんですけども、僕がいいなと思うのは、すごくそこに幅があるというか、自由であるということなんですね。その幅、思考の幅というのは、これも年齢を問わないんですよ。なので、小さな子供から年配の方までいろんな感じ方ができて、それが何かその人にとって豊かな生活を送る一つの何かきっかけになったりとか、そういうことが生まれるといいなと思っています。その柔軟な思考を身につけるということが、僕はいろんなことにつながっていくと思っているんですね。さきほどの直島の話も出ましたが、最終的にはその地域にいる人が笑顔になるというか、生き生きと暮らすというのが僕は大切だと思っている、そのためのメディアというか、媒体としての美術館であり美術ということ、それが地元の前田寛治さんとかであっていいしほかの作品であっていいとは思っているんですが、人が変わっていくというところにつながるということがすごく大切だなと思っています。

あとは、よく金沢でも話題にあがるんですが、金沢って観光地でたくさん人が来るようなイメージがあるんですけど、僕自身はその点は良くない、良くないと言うか、観光客がたくさん来るから安泰ということは全然なくて、逆に金沢らしさが失われている部分がすごくたくさんあると思っているんですね。金沢から倉吉に久しぶりに帰ってくると、自分がこどもだった頃の、昔から変わっていないものがまだすごくたくさんあって、そういう中にすごくいいものがたくさん残っているんですね。僕は米子高専在学中の5年間、米子で暮らしていたんですが、去年の夏に一人で米子の街中をふらっと歩いたんですけど、何時間か歩いただけですごくいい場所をたくさん発見して、米子のまちのことを実は全然知らなかったことに愕然としたんですね。まちや人、そういう魅力というのはすごくたくさん埋まっていると思うので、さきほど原田さんが地域の魅力を引き出せる場所になるいいのではないかとおっしゃっていて、僕もすごく同感するところです。何かそうやって美術館単体の話ではなくて地域づくりとか人づくり、いろんな関わりがあって、最初に話した「柔軟な思考を身につける」ことがきっかけとなり、まず最初に「人が変わる」ということがいろんなことを変えていく原動力になると思っています。

○中島教育委員長 どうもありがとうございます。

そうですね、確かにおっしゃるとおり、これだけ多くの方がいらっしゃってくださったというのはすごいことだなと思いますし、こういうことをきっかけにして、確かにアートというのは答えがないんですよ。別にこう見なきゃいけないということではなくて、いろんな人がそれぞれの立場で、自分でものを言葉を作って、それを語って共有して、自分を確認し他者を確認するという関係が生まれてくるというところが一番すばらしいですよ。これは本当に社会の基本だなというふうに思います。ありがとうございます。

では、今度は根鈴さん、お願いできますか。

○根鈴氏 美術館が倉吉にできると決まったときに、いろんな方から「これで倉吉は活性

化しますね」という声をいただくことが多かったんですが、私はそのときに、「いや、美術館ができただけで活性化なんかしませんよ。10万だ、20万だって人を入れるためには、みんながこの地域の魅力を発信しなくちゃいけませんよ。」先ほど尾崎副館長が「この集客を見込めない倉吉につくった」という話がありました。原田さんが押し戻す前に、私がまず手を挙げて押し戻さなくてはいけなかったのですが。「いえいえ、そんなことはない。ここには美術資源が既に整備されていて、ポテンシャルの高いいろんな文化資源、美術資源があるんですよ。」これらをやはり地域に活かしていかななくてはいけないというふうに思っております。

美術というのは、美術館に行かないと出会えないというものではないと思うんですね。やはり街の中にアートはあふれている。街の中にあるものからいろんな刺激があって、その感性でもって創作活動に進んでいく。その創作活動をしようとしたときに、倉吉博物館はこれまで約30年ばかり彫刻、日本画、洋画、いわゆるトリエンナーレ美術賞というものをつくってまいりまして、そこでの作家さん、審査員の方とのいろんなコネクション（つながり）がございます。何か創作したいという人たちに対して、そのガイドとしてそういう作家さんによるセミナーのようなものも開くことができるのではないかなというふうに思っております。ですから、美術を通じてといいますか、そういった創作者にとって、この地域が創作の発信拠点になればいいのではないかなと思います。

原田さんから、発信力という話がありました。倉吉博物館も、倉吉は人口5万を今切っておりますけれども、倉吉博物館の入館者は4万はあります。それは、やはり発信力のある展覧会もありますので、1カ月の展覧会で2万人も来られることもあります。いわゆる発信力、メディアと共同、一緒になって、より発信していく力というのはとても大事だと思います。そのためにも原田さんがおっしゃった「非常にいいものがある。学芸員も非常に頑張っているけれども、発信力が無い。届いていないんだ。」という指摘。私の博物館でも、催し物が終わった後いろいろ問い合わせがあったりして、「そんな展覧会があるんだったら、もっと早く知りたかった」とよく言われるんです。あるいは、展覧会が終わってから来られる方もあります。やはり、発信力というものを身に付けていかななくちゃいけないけど、メディアへの経費というのはなかなか難しいですね。

金沢21世紀美術館は年間150万人ぐらいで、平成26年は250万ぐらい入っていますよね。新幹線効果で250万ですよ250万。それだけの人が入っているけれども、同じ業界だから明かしますが、有料で入っているのはだいたい3分の1ぐらいですよ。だから100万人集まったとすれば、お金を払っているのは30万人ぐらいです。けれども、100万だ150万だという人をそこに集めることが必要なんです。いろんな交通手段でそこに行きます。おそらく金沢であれば、もちろん金沢21世紀美術館が目当てではあるけれども、そこから兼六園に行こうあるいは伝統文化に触れてみよう、そこからやはり広がっていく。だから、県立美術館ができて人がたくさん来て終わりではなくて、そこから広がっていく。点と点が結び合って面になっていく。この倉吉は文化資源、美術資源を既に整備しておりますので、アートゾーンとして空間設計をして、いろんな方が回遊できるような、そんな地域になっていけばいいかなと思っております。

○中島教育委員長 ありがとうございます。発信、確かにあるのだと、既にいろいろなものがあるのだということですね。おっしゃるとおりだと思います。

では、今度は富山さん、お願いいたします。

○富山氏 一つだけ、私、こんな街になったらいいなと思うことがあります。

美術館ができて、子供たちが4年生でここに全員来て10年後、この街角で見かける人にどの方に質問しても「自分の好きな絵はこれです」とうんちくを1時間でも2時間でも語れて自分の人生と思い出を語れて、そんな街になったらいいかな。おじいさん、おばあさんも「わしゃあこの絵が好きでな」と言える、小さな子供も「僕ね、あの絵好きなんだよ」って「あの青がきれいだよね」と言える、そういった子供から本当におじいさん、おばあさんまでが、自分の好きな絵と自分の思い出を絡めて話せるそんな街になったら、多分もう既にそのときに全てを発信しているんじゃないかなって思いますが、そんな街になったらいいなと思います。

○中島教育委員長 なるほど、わかりました。いいですね。

では、尾崎さん、お願いできますか。

○尾崎副館長 最初に誤解を解いておきますけど、集まらないと言ったのではなくて、集めるというモデルではなくて新しいモデルが必要だということをお願いしたいので、そこは御理解ください。それで、さっき原田マハさんが倉吉モデルとおっしゃいましたけど、まさにさっき言った第4世代の美術館をつくるとしたら、そういった倉吉モデルとして全国に発信できるようなそういったモデルをつくっていく必要が、まだあまりはっきりした具体的には言えないんですが、そういう気概を持つ必要があると思うんですね。

それで、最初の質問に戻るんですけど、場所は決まりましたけど、具体的にどういう美術館ができるかまだイメージが皆さん湧かないと思うんですね。ただ、これはもうすぐ建築が次第に決まってきます。それで、皆さんが「エッジの効いた」とかおっしゃっていますけど、かなり美術館の建築のプランが出てくると、具体的にこの美術館に対する期待が高まっていくと思います。そこで、さっき言いました人とのつながりは、私、重要だと思いますので、そこでそのプランが立ち上がってこういう美術館ができるんだということが明らかになってきたときに、できればここに集まった皆さんそして倉吉の皆さんが、どういうふうに関わっていけるんだらうということを考えていただきたいと思うんです。

それで、やっぱり美術館を変えていくのは、きょうの原田マハさんの話にもありましたけど、私たちとか学芸員も含めて、そこに住む者だと思うんです。ですから、それを考えていくというのが、これから美術館が具体的にになっていく過程で我々がしていくべきことではないかなというふうに思います。

○中島教育委員長 ありがとうございます。

今おっしゃってくださったように、今、基本構想に基づいて基本計画を考えていて、それを年度明けぐらいでしたか、そのタイミングで皆さんにお示ししてというふうに進んでいきますので、それを受けてまた皆さんからもいろんな御意見をいただきながら、だんだんと具体化していくという形になるかなというふうに思います。

〈会場とのやりとり 略〉

○中島教育委員長 どうもありがとうございます。

ということで、時間を過ぎてしまいましたが、これでパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。原田さんを初めとしてパネリストの皆さん、どうもありがとうございました。（拍手）